
ダラダラみかん。

国後旺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダラダラみかん。

【Nコード】

N7408F

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

全力でダラダラと、妹とか友達とかと過ごす……冬休みの話。（ジャンル：コメディ）

登場人物紹介。

今作の登場人物を、紹介します。

1 - - - 主人公 - - -

十九歳。 童話作家。 基本視点キャラ。

基本的に、冷静な傍観者。

脳内ツツコミが武器。

- - - - -

2 - - - 琴 - - -

主人公の妹。 小学五年生。

お兄ちゃんっ子。

- - - - -

3 - - - リン - - -

高校三年生。主人公の友達。

ノリ担当。登場人物中、一番普通の人。

- - - - -

4 - - - くらたん - -

十九歳。主人公の友達。

弱々しい。いじられ役。

- - - - -

5 - - - - 星葉 - - -

小学五年生。 琴の友達。

ボケ担当。 ちょっと痛い子。 元気すぎ。

- - - - -

6 - - - 小太郎 - - -

十九歳。 主人公の友達。 アメリカ人とのハーフ。

女好き。 仲間思い。 カンが良い。

- - - - -

7 - - - 志太 - - -

小学五年生。 琴の友達。 小太郎の弟。

ノリ、ツツコミ担当。 微笑み紳士。 ノリが良い。

- - - - -

8 - シュウさん -

主人公の担当編集。

メガネ美人だが、モテない。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

登場人物紹介。（後書き）

更新は1月7日までの短期連載とさせていただきます。
どうぞ宜しくお願いします。

お、お菓子が無い！

十二月二十一日。妹の冬休み二日目の午後三時。俺の部屋にて。

俺はキシリツシュを噛みながら、文庫サイズの小説を読んでいた。すると、急に俺の部屋のドアが大きく開き、妹が猛牛のように俺の部屋のカーペットに滑り込んできて、

「ねー、お兄ちゃん。お菓子無いよー！」

あぐらを掻いているオレの太ももとふくらはぎの間に、ちっちゃくて真つ白な指を潜り込ませながら、胸部はオレの眼前のカーペットに設置し、実の妹である琴は上目使いで聞いてきた。

ん。目の下にクマができているな。

いつもはキレイな目をしているんだが。

「お前、夜更かしすんなよ？」

「えー？ なんのこと？」

ああ。これは最後までとぼける気だな。

「……たくっ」

「いたっ」

つぶやいて、琴に軽くデコピンをした。

たぶん俺は砂糖微量レベルのシスコンかもしれん。

話は少しそれるが、オレの家の家族構成は、オレと今年で小学五年生になる妹の二人だけで、この二人で福岡県に在る、とある一軒家に住んでいる。

カネは、俺の童話作家としての収入でなんとかなってる。

最大の利点は家でできること。

外に出る作業を殆ど省くことができ、少しラクだ。太りにくい体質で本当に良かった。

ちなみに今は琴が冬休みなので、その間分の休暇をとっている。担当編集が、仕事のスケジュールくらいは見せにくるかもしれないが。

妹は一人だと飯も作れないから、一人にするわけにはいかないんだ。

そのため、俺と一緒に住んでる影響かは知らんが、すっかりぐーたら生活に身を捧げてしまった妹の琴と遊ぶことが、冬休み中の日課になっていた。

では、話を戻そう。

さて、日頃の過ごし方を少しばかり暴露しているうちに、琴が退屈の余りか、その他の理由かで機嫌を損ねてしまったらしく、俺の背中にスパイダーマンのボール型クッションを投げつけ始めた。

別に痛くはないが、とてつもなく鬱陶しい。

「お菓子お菓子、おーかーしー」

スパイダーマン（以下略）を投げつけ、弾いて、糸でも張っているかのように、何度も自分の元へと帰還するスパイダーマンを何度も何度も俺に投げつけながら、呪文のように、

「おーかしー。おーかしー。おーかしーはーどーじやー」

と繰り返す琴。
壱 鬱陶しい。
あ、あ、
壱 鬱陶しい。

だいぶ前。俺と、俺の友達とでユニバーサルスタジオに行った際に、土産として買ったスパイダーマンが、まさか妹の専用武器になるとは思わなかったよ。

とりあえず今は、目の前の敵を排除することに専念させてもらう。

俺は手元の推理小説を、すぐ隣のベッドに放り投げ、天井に頭が届きそうな勢いでハイジャンプをした。

そして琴の小さな両肩を両手で鷺掴みにして、

「お菓子は無い。品切れ中だ」

「なんだってえええええええ！」

妹の口から、ガビーンの効果音が同時に発せられた。

唾が飛んできたので、指ではじいたら、琴の頬に着地した。

「じゃあ買ってきてよ」

琴は頬を、俺の服の袖で拭きながら言った。

「それはまた今度な。今日はヤダ」

「えー。なんでー？」

「なんとなく」

「ん」

口をアヒルみたいに尖らせながら、唸る琴。

ふっ。安心しろ、琴。

「お菓子は俺が作ってやろう」

「えええええええ！ マジでか！」

「マジでだ。んで作るのはケーキだ」

「うわー！ すごー！ お兄ちゃん大好きだー！」

「じゃあ台所に行くかー」

「おっしやー！ あ。お兄ちゃん、しゃがんでー」

言われたとおり、俺が膝を曲げてしゃがみ込むと、琴は俺の背後に回りこみ、俺の背中に飛び乗った。そして俺の右肩に顎を乗せ、

「お兄ちゃん号、発進！」

と言った。耳元で言つので息がかかり、ちょっと震えてしまった。

あとな、耳元でデカい声出すなコノヤロウ。

俺の部屋は二階に存在する。

そして、台所は一階に存在する。

俺の背中には琴。眼前に階段。

「琴。背中で暴れんなよ」

「ラジャー」

階段の一段目に足を掛けた。

「うおおおおおおしゃああああつ！」

俺は、叫び声とともに、一気に階段を駆け下がった。

ダダダダダダダダダダダダ！

背中 of 琴は上下に揺れながら「おおおおおおおおおおお

！」と叫んでいた。

完全に階段地獄から解放された俺は、水の放射を止めたホースのようにしおれていた。

ああ、疲れた。最近、運動してねーもんな。

目の前の台所に近づこうとしたとき、不意に琴が両腕で首を絞めてきた。貧弱だから大して絞まらないが。

「どしたよ？ 琴」

「もっかい」

「は？」

階段を指差して、琴は言った。

「もっかい！」

「するかっ！」

さて。道中に若干、体躯が老化したような気がするが、とりあえず、

「そろそろ、退け」

琴は舌打ちをしてから、俺の背中からズルズルと剥がれ落ちた。

チーズケーキでも作るか……あれ？

「琴。ひとつ聞く」

「なにー？」

「チーズケーキで、どう作る」

「いや、知らんがな」

「そうか」

やれやれ。困ったことだ。

作り方をすっかり忘れてしまった。

「ええ？ そんな。あたしはもう、フォークと皿をコタツに設置してしまっただけなのよ！」

「まあ待て琴。まだ望みは潰　つい　えてはいない」

「なん……だと？」

琴がゴクリと息を飲む。

「リンに電話する」

ばあ　ああああん！　と、背後に効果音の琴。

「そ、そうか！　ケーキ・オブ・レジェンド・リンちゃんならば！」

「ああ。さっそく電話をしよう」

リンに電話する。

『こんにちは！』

「おお、リン」

『今のあたしは、とてもじゃないけど電話に出れる可能性は皆無なので、

ピー！ ピョロピョロー！ の発信音のあとに用件を知らせてくれい！

では！』

『ピー！ ピョロピョロー！』

ぴっ。

ボディーガード』くるたん』

十二月二十二日。玄関前にて、俺。

「琴ー。ナニしてんだよ、早くしろー」

「ウンコしてんのー!」

「はあ?」

まじでか。アイツ長いんだよなクソ。

しょうがないから、時間を潰すためにDSをしようと思い、家中に戻った。

階段を上がる。

しかし。いつもの場所（ベッドの小さな引き出し）にはDSが無かった。

なんでだ?

寝室の横のトイレに入ってアレを出すことに奮闘している琴に、DSの居場所を知らないか聞いてみることにした。

「なあ琴。DSどこあるか知らない?」

『とうるとうるとうるん』

ゲームの音がした。ゼルダだな、コレ。

「琴、ゼルダ面白い？」

「最高です！」

「そうか。行つて来まーす」

「なっ！」

階段を下りて、玄関に向かった。

「ああああああ今出ます今出ます！」

上の方で水がごぼごぼーって音をたてていた。

車のエンジンが元気よくはしゃいでいる。

「タンマタンマタンマタンマあああ！」

「行つてきまーす」

玄関ドアが勢いよく開いた。琴が走ってきて車にへばりついてきた。

「ふふふ、行かせないぜ！」

「さっさと乗れ」

街中の赤信号で車を止めた。

街中の木。……紅葉も枯れ木には愛想を尽かす。

「で。ドコに行くんだっけ」

後部座席で寝そべりながら琴が問う。コイツなにしに来たんだろ……。

「お菓子欲しいって言ってただろ。ついでに色々買い込んどく。ケ
ーキも作ってねえし」

「あつ！ じゃあテイルズ（テイルズ・オブ・ハーツ。ゲーム名）
もついでに買って！」

「却下。高いよ、まだ出たばっかじゃん。ついでになってねえ」

「ケチ」

「ケチで結構」

鏡ごしに、琴に向かって舌を出した。

『とうるとうるとうるん』

背後からゼルダの謎解き音が鳴った。

そしてそのあと、琴が上半身を起こして外を見ているのに、ミラ
ーを通して気付いた。俺も見てみる。

「おっ」

俺の友達が歩いていた。

琴が軽く窓を叩くと、こっちに気付き、ふいっと、こっちを向いた。

「ふおっ！」

琴が自顔を手で引っ張って、変な顔でもしたんだろうな。面白い驚声を発した。

そしてツボにハマったらしく、しゃがんでむせていた。

ああそうだ、ついでに。

俺は窓を開け、むせまくる友達……くろたんに、言った。

「お前、今ヒマ？」

「ぐっはぐは、ん、んん、うん」

「じゃあ買い物行かね？」

「ああ、うん」

くろたんは後部座席に乗った。

「おおー、くろたん久しぶり」

「おおー、琴ちゃん久しぶりうつつ」

またしてるよ。くろたん吹いてるよ。

「琴、いい加減にしなさい」

「はい、あにじゃー！」

こっちを向いた。その顔は俺には通じねえ。

「わりいな、くろたん」

くろたんは結構ツボりやすい。とくにこっぴう不意打ち系は苦手だ。

ちなみにくろたんは男だが、中性的な顔立ちをしている。可愛いあだ名も、それが原因だ。

さて。もう一度言っが、くろたんは結構ツボりやすい。とくにこっぴう不意打ち系は苦手だ。

「ああ良いようっつっつ」

だから俺もノリに乗った。いた。

「うわああああお兄ちゃんハンドル手え離すなああああ！」

いやあ愉快愉快。

スーパーに着いた。

くろたんはドツと疲れた顔をしている。俺と年齢変わんないのに、哀愁が漂っている。

琴はというと、スタート時からハシヤギ方が衰えていなかった。

俺はというと、もっとくろたんをいじりたかった。

「着いたよ」

「あ、うん」

「わっしやああああ！」

琴がアホみたいに叫んだ。まあ、アホだから仕方ない。

「くろたん、琴のボディーガード頼むわ」

「え？」

琴が、くろたんの服の袖を引っ張った。

「さあゆこっ、くろたん！」

「え？」

超高速スピードでスーパーに乗り込んでいった。いってらっしゃい。

俺は車に鍵を掛けた。

俺もスーパーに入って、野菜類のコーナーに向かった。

試食コーナーにはたくさんのパイナップル。

琴がパイナップルの試食をしていた。パクパクパク口にする。幸せそうに微笑んでいる。

「イエス！ パイナポー！」

なんか言ってる。

くろたんは肩で息をしていた。後ろ姿がなんか切ない。

俺は野菜をボンボンとカゴに入れていった。ナスが安売りしていたので、いつもよりも多く買った。

あとは菓子と、肉と、牛乳と……。

「お。先輩やないっすか」

後ろを向くと、ポニーテールで、背のちっこい童顔の女の子が俺を見上げていた。

「おお。リンじゃん」

こいつは高校時代の一個下の後輩で、今でもよく遊んだりする奴だ。

「珍しいっすね。琴ちゃんが一緒やないて」

「くろたんに押し付けてきた」

「お、黒民先輩も一緒なんっすね」

「ああ、道中でラチって来た」

「あは。あつ、はっ……はっ………」
『くちゅん』

相変わらず、くしゃみ可愛いな。

「風邪気味なの？」

「あはは。アイス喰いまくっちゃって」

「あー、寒いほど喰いたくなるよね」

「そうそう。あ、あたし明日遊びに来ますね」

「ああうん。あつ。じゃあケーキ一緒に作ろうよ」

「おつ。ちったあ上手くなりましたか？」

俺は最近リンから、よくケーキの作り方を教えて貰っている。

「なめんなよ、もおケーキマスターだぜ俺は」

リンの頬を指で突きながら言った。相変わらず、むちゃくちゃ柔いな。

「ふっふっふ、ケーキマスターはあたしですよ、小僧さん」

真下からデコを指で突かれた。冷たい指だ。

「じゃあ、またな」

「またねー」

ぶんぶんと腕を振ったら、向こつもぶんぶんと振る。それを数回繰り返して別れた。リンは外へと消えていった。

さて。肉コーナーは……と。

これで良いな。肉に魚に野菜に菓子にその他色々、一通り揃った。

さて、帰るか。

琴に『帰るぞー』とメールした。

しかし。返事が来ない。なぜだ？

念のため、試食コーナーに行ってみた。

くろたんと琴が店員から怒られていた。

あとで聞いたら、原因は試食し過ぎたことだったらしい。

くろたんがしおれまくって、思わず吹いてしまった。

私は星のヒト！！！

十二月二十三日。今日は寒い。俺はコタツの中に潜り込んでいた。

琴が入ってきて、顔面を蹴られた。

鼻を押さえながら、俺は琴の横から這い出た。

「うわ、お兄ちゃんゴメン」

「いや、俺が悪いよ」

「あ、そう？ 良かった」

琴がまた蹴ってきた。また蹴ってきた。うお、痛い、痛い、わざとかよ。

「わざとかよ！」

「ひぎゃっ」

琴はグイーン

と後ろに押し倒した。

「おらおらー」

「ふがっ」

くすぐった。痙攣しまくった挙げ句、琴は死んだ。

「勝手に殺さないで下さい」

「そうか。ゴメン」

琴が俺の横で、とてもはあはあ言っていた。

「興奮してんのか。琴よ」

「してるわ。マジで」

「俺のこと、好きか。琴よ」

「好きだわ。ガチで」

「ガチか」

「ガチで」

「そうか。あんま興奮しないでくれ」

「いやいや、あんたのせいね」

『ピンポーン』

チャイムが鳴った。リンが来たのか。

「ちょっと出て」

「うん」

琴は玄関の方へ行った。琴のデカい声が聞こえてくる。

静かだ。コタツの低くて小さな唸り声が聞こえるくらい。

「ヒマヤから遊びにきたわー」

「あれ、星葉か」

「そうそう。星の妖精、星葉ちゃん！」

星葉は琴の友達だ。読み方はセイハ。

ショートカットで細目でカラダも細めな子。パンチしたら壊れそうなくらい弱そうだけど、凄い元気なんだよ。

「そうそう。半端なく元気よあたし」

「自分で言つなよ」

琴がふにゃふにゃ声でつつこむ。玄関から帰ってきたばかりで寒いんだろうな。ここからは二人のコントをお楽しみ下さい。

「いやあ、外は雪降ってますねえ琴さん」

「そうだねえ」

「じゃあ、子供は元気に！」

「コタツの中で丸まる」

「そうそうそうそう、やっぱり子供は元気にコタツの中が一番だねえ。ほつくほくだねえ……て、いや外で遊ぼうよ！」

「寒いもん」

「な！ なななななな軟弱者っ！」

「えー、だって霜焼けしちゃうよ燃え尽きちゃうよ」

「良いじゃんよー。雪の中で真っ白になるうぜ？ 趣あるぜ？」

「いいよ別に。家のなかで真っ白なお餅食べるから」

「お餅だと？ お前は、おばあちゃんか」

なんでだよ。

「焼いてあげないよ？」

「そこは焼いて下さいよお、琴さまあ」

喰いたいのかよ。

「あ。俺、あとでチーズケーキ作るから」

二人が、ガッ！ とコツチを向く。

「それ先に言つてよ！」

「そうそうそうそう、そういうことなら話は別だよ！
大人しくコタツで待ってるよ！！
てゆうか早く作ってよ！！！！」

星葉はコタツの中に潜り込んだ。

それを琴が星葉の両手を掴んで引きずり出した。

「いやいや、星葉は外で雪だるま作りまくってて。二度と帰ってこないで」

「ええ、なんでよ琴さま」

「星葉消えたら食べられる量増えるじゃん」

「そんなの、酷すぎる！ あ！」

星葉が、なんか立ったまま固まってしまった。どうしたのかと聞いてみる。

「いやあ、叫んでたらお腹が痛くなったので」

関係ない気がする。

「ちよつくら、ウンコしてくらあ！」

星葉はトイレに向かって走り去っていった。

「ウンコなんて……星葉って何であんなに下品なんだろうね、お兄ちゃん」

「うん、お前の言うセリフじゃないね」

みかんの皮を剥きながら、俺は琴のことを不思議に思っていた。

「なんでお前、星葉ちゃんに対してはクールなの？」

琴が首を傾げた。

「なんでだろ？ 嫌いじゃないんだけど……。なんか、星葉に対しては冷たくしちゃうんだよね」

琴は俺が剥いたみかんを奪って、口に丸ごと頬張りながら答えた。
「うおい。」

「取んな」

「分かった分かった。じゃあ口移しを、」

「戻さんでいい」

「じゃあ、私にくれ！」

トイレから戻ってきた星の妖精の言葉に、琴は露骨に嫌な顔をしていた。いやいや、あんた絶対嫌いだろ。

「くれよう、くれよう」

「やだよう、やだよう」

「くれよう、くれよう」

「やだよう、やだよう」

「じゃあ、あたしに頂戴？」

あ。リンが来た。二人がリンの方をガッ！ と向く。

リンが少しビクツとした。

「リンちゃんならいいよー」

「えー、差別かよお。てゆうかリンちゃん久しぶり！」
「久しぶりー」

てゆうかリン、インターホン鳴らしたか？

「ううん。ドアが開けっ放しだったから」

俺は二人をガッ！ と見た。

「また閉め忘れか……てめえら」

「すいません……本当にすいません」

「あっはははははは！ こまけえ野郎だ！」

「あ！ 星葉のあほ！」

殴り殺してみた。

「あーあ、星葉……」

「無念……」

「さて、リン。一緒に作ろうか」

「あはは。はい、先輩」

「ああ、リンちゃんが一緒なら安心だ」

「琴、お前も喰わなくて良いよ」

「すいません……本当にすいません」

あ、そうだ。

イヴに寿司を食うという、反抗期。

十二月二十四日。今日はクリスマスだ。イブだ。

俺はコタツに入ってみかんの皮を剥いていた。剥き終えた。

「彼女いないの？」

コタツ向かいの琴がみかんを剥きながら言った。

いや、まさか小学四年生の妹に言われるとは。

「いたら、ここにいないかしんないよ」

「あつははは、確かに」

琴はみかんを一粒取って口に入れた。

「お前こそ、どっか行かねーの？」

「いやあ、キミがいるのでね」

妹が俺の顔を指差した。

良い妹を持ったもんだ。

ふと手元を見る。

みかんが無い。

琴はみかんを喰っている。琴の手元のみかんの束数が増えている。

寝たまま、駄々をこねる琴。言ってることが矛盾している。

「ケーキだよ」

「ケーキじゃねえ！　なんだあのブニブニパニヨパニヨ感は！　超ケーキじゃねえ！」

パニヨパニヨて何だよ。

「でも旨かったろ？」

「いや、まあ、おいしかったけども！」

「じゃあいいじゃん」

「そこは、よくねえよ！」

「だから今日は寿司喰いに行こう」

「うおっしゃ、行こうか！　さあ準備しよう！」

琴はガバツと起き上がって、自室に向かった。水玉模様のパジャマ姿のまま。

俺もパジャマから着替えるとしよう。

しいい・ジャックに着いた。

「いかああああああああああ」

回転寿司だ。

「がありがり、すっばいよ」

琴がイカにガリをたくさんさせている。

「なっふうううう！ うまし！」

机をバンバン叩く琴。

俺はサーモンを喰っている。

「マグロきたあああああああ！」

うん、旨い。

「やっべえよ、うめえよコレ！」

緑茶、緑茶。旨い。寿司屋の緑茶は、なんか旨い気がする。

「とろおおおう！ 舌の上のとろおおおう！ とろおとろとろ」

「あの、お客様、静かにして下さい。……って、ええ！」

「あ、すいません」

「あ、あ、き、気をつけて下さい」

緑茶を飲むと、なごむなあ。

「いやあ、たまに寿司屋に来ると、はしゃいじゃうよねえ」
「そうだねえ」

お前は異常だけどねえ。

「あ、そういえば、さっきの店員さん。くろたんだったね」
「ここで働いてるからねえ」

俺はイクラを取った。

「ああ、知ってたんだ」

「ここに来たのは、くろたんをからかいに来たのもあるから」

裏方に戻ろうとしている、くろたんに視線を向けると、ビクビクしていた。ウサギかよ。

「まあでも、やっぱり可哀想だからやめとこつ」

「もうすでに、ドジってるもんねえ」

「ああ……」

イクラの上に、ワサビが乗ってやがる。

前を向くと、琴がスプーンをカタカタ震わせていた。

「プリンの上に、ワサビが乗ってやがる」

しかもクリーム風に。

「は、今日はゴチソー様でした」

「お粗末様でした」

コタツに入ってダラダラとみかんを喰う。

クリスマスでも、最初から最後までいつもどおりだなあ。

「クリスマスでも、最初から最後までいつもどおりだなあ」

琴がまったくいっしょのことを言うから、ちょっと笑ってしまった。

「ああ、そうだ琴。ちょっとこっち来い」

向かいの琴に向かって手招きした。

すると琴は、コタツを潜ってこっちに来た。

「なあにー？」

ズボンの後ろポケットから出す。

「プレゼント」

「おお！ まじでか」

包みを丁寧に剥がしていく琴。

「こ、これはテイルズ・オブ・ハーツ！」

立ち上がってハシヤぐ琴。

「やりこめよ」

「ソッコーでクリアするよ！」

それはやめてほしいなあ。

さっそくDS点けてるなあ。

「ああ、そうだ。お兄ちゃん
ん？」

ドタバタと走って自室に向かう琴。

ドタバタと帰ってきた琴。

そしてコタツに頭から突っ込む琴。

手にマフラーを持っていて、それを俺の横腹に押し付けた。

「プレゼント！」

コタツの中から曇り声。

「もしかしてこれ、お前が」

「そうさ、買ってきたのさ！」

向かいから声が聞こえてきた。

……ああ。目の下のクマは、これが原因だったか。琴よ。

「ありがとな」

「ん、うん。こちらこそ」

部屋の中で俺は、マフラーを巻いた。

窓から見える外では、白い雪が降っていた。

「こなあーゆきいー」

琴が高い声で歌っていた。

クリスマスの夜の歌姫。

十二月二十五日。午後三時。今日もクリスマスか。

「一応、今日もそうだねえ」

「そうだねえ、琴」

二十五日のクリスマスでは、友達を呼んで騒ぐのがだいたいの流れになっている。

いつもどおりのパワーアップバージョンみたいな感じだ。

急だが、俺の家では、みかんは箱買いだ。

そしてそれを、玄関近くに置いている。

普段はそこから何個が取って、コタツの上の大きな白い皿に置いている。

だが今、琴が最後のみかんを取ってしまった。俺も喰いたかった

というのに。

「だから、みかん取ってきて琴」

「ジャンケンして、お兄ちゃんが勝ったらいいよ」

「ほお。やろうじゃないか」

負けたので、俺が取りに行った。ジャンケン……強くなったな、琴よ。

「というか今の、あたしに何のメリットも無くな？」

玄関まで取りに行ってみて、箱を「ばああああん」と開けた。

ああ、ヤバい。もお、殆ど無い。正確に言うと、五個しかない。

この前、買ってあげば良かったな。

……そうだ。小太郎に買ってきて貰おう。

小太郎は元同級生で、今でも一緒に遊んだりする……まあ、くらたんやリンと同じような関係だ。

ケータイを開く。

『……んを。どした？』

あれ？　なんか声が枯れてる。ハスキーなのは元々だが、これは変だな。

「小太郎。具合わりいの？」

受話器からかすれた笑い声が聞こえてくる。

『ん。ちよつと熱あんだよ』

「そつか。じゃあ今日は来れねえな？」

『はは、わりいな』

「いやいいよ。さっさと治せよー」

『おう』

電話を切った。最近来なかったのはコレが原因か。珍しい……。

くろたんは車、無いしなあ。

リンはバイクだし……。

明日、買いに行くか。

そう思いながら、玄関から去ろうとした時、タイミング良くインターホンが鳴った。

玄関ドアに付いている、白濁色の窓ガラスに、小さな女の子のシルエットが映る。……これは、星葉だな。

よし、驚かそう。

ドアを「がああああん！」と蹴った。

すると「ふうおおお……！」と言いながら、シルエットは腰ついた。

星葉はビビりだ。

「いらっしやい、星葉」

「ぼ、ボス。そういうのやめてよ。あやうく、心臓がノドにへばりつくところだったよ」

「……俺が言うのもアレだが、落ち着けよ」

星葉は靴を脱ぐ為に、一度しゃがんだ。

そしてそれを綺麗に揃えて、リビングへと走っていった。

「琴ー、星のキューピットがきたよー」

「うわ、」

露骨に嫌な顔をする琴だが、呼んだのはコイツだから、文句は言えないだろう。このツンデレが。

そんな意見を飲み込んでいると、背後の気配にも気がつかないわけ。

「よいしょおっ」

浣腸された。しかもリンに。

いつもは星葉が来るとクールな琴も、ハシヤいだ。

「入ったああああ、ホームラン！ 実況の星葉さん、アレをどう見ます？」

「いやあ、良い角度でした。ごちそうさまです」

「おおっとリンちゃん、ここでガッツポーズ！」

おいしい。盛り上がんな、ソコ。

「スキだらけつすよ。先輩」

「いや……。お前がそれをするとは、思ってたから」

「基本守備範囲、小太郎ちゃんオンリーだもんねえ、お兄ちゃん」

「ミスター浣腸は今日来ないって聞いたから、あたしがやつときました」

「え？ 小太郎ちゃん来ないの？ リンちゃん」

「うん。『熱ヤバいから来ない（-|-）』ってメールきたあ」

「ああ、だから最近家に侵入して来なかったのかあ。しかし熱とは珍しい」

「そうそう。コタくん、熱でしたらハンパなく長引くよね。小学生並みに」

星葉がコタツから首だけ出して、そう言って占めた。小学生に言われたら終いだな、小太郎。

女に浣腸される俺もアウトだが。

「てゆうかどうやって入ったの？」

「いや玄関が開いてたから」

琴がジトオつとした目線を向けた。

俺は二日前を思い出していた。

悪かったな。人のコト言えなくて、悪かったな。

インターホンのベルが、鳴り響いた。

「くろたんも来たことだし、クリスマス会を始めようか」
「おっしやあああ。カラオケしようぜ！」

家にはWiiがある。最近、Wiiでカラオケが出来るようになったんだ。

「おっしやあああ。採点しよう！　まずは一人一回ずつ！」

琴、張り切ってんなあ。

「先輩、先輩」

「ん？」

「負けませんよ」

「あー。うん」

てゆうか、適当に歌って楽しめばいいじゃん。

どうせ、接戦になるのはくろたんと琴だ。もおパターンだ。リンとか俺は三位争いで、星葉がビリ。決まりだよ。

「俺行きまーす」

矢島美容室のやつ。

「お、お兄ちゃんがハジケてる！」

「せ、先輩、ぷふうう！」

『95点』

「お、お兄ちゃんがこの点？」

……ネタの方が取れるんか？

「ほい。リン」

マイクをリンに投げる。

お。おお。おおおお。なんだこのピリ辛な視線。

「負けんっすよ。ぎろっぽん！」

ああそつか。俺が鼠先輩歌えば良かったな。先輩だし。

「ぽっぽぽぽぽぽぽーっぽー

ぽっぽぽぽぽぽぽっぽっぽぽっぽー

ぽっぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽーっぽっぽ
」

高い声で「ぽっぽぽっぽ」言われるのってなんか良いなあ。新たな発見だな。新た

『96点』

「やったああああー。一位じゃないけど、先輩には勝ったああああー！」

「そんなに嬉しいか？」

「もー、テンション低すぎっすよ先輩はー。少しは悔しがって下さいよ」

「いや、お前の歌う姿が可愛かったから満足だよ」
「ええ！」

リンが少し顔を赤らめた。

「なななに言ってんすか先輩！」

「本音」

「うわわもおうわわ！」

俺はリンのこういう反応が、堪らなく面白いと思う。

「きゃあ、もおボス！一生ついてきます！」

「ああ、ついてこい」

星葉がムチャクチャ興奮している横で、琴は「なんだこれ」と言っていた。ばそつと言っていた。

「琴。お前だよ」

「分かってるよ」

「はい、琴ちゃん」

「ありがと、リンちゃん」

マイクも渡り、俺は琴を注視する。

「好きな歌っていいよ、琴さま」

「分かってるよ。そういう流れだよ！ 帝王なめんな！」

音楽が鳴る。

「はむそーせーじ、おーいしそうー はむそーせーじ、たーべた
いなー」

『99点』

っ、っおい。

「ふはははははは！ どうだ！ 帝王なめんなよ！」

「ぶぶ、でもハムソーセージで……あんだ」

「うっさい！ ポニョも大差ないわ！」

「琴ちゃんの勝ちだね」

「まあ、一応予想通りか」

そんなとき。コタツの中で首だけ出していた……くろたんが前に
出た。忘れていた。

「おお、黒民先輩」

琴が武器にしているマイクを優しく奪い、曲名を告げた。

「L・Arc-en-Ciel『Hurry Xmas』」

『100点』

神。

キミの頬は柔らかい。

十二月二十六日。午後二時。

昨日の面々はそのまま家に泊まったが、星葉は家の用事で午前中に帰った。

くろたんは二日酔いで頭がガンガンするらしい。俺はそんなに飲んでないので平気だ。しかし、くろたんに付き合った（というか、付き合わせた）リンはピンピンしている。酒豪、リン。

「あ、あた、ま飛ぶ……」

くろたんはコタツに入って、頭をギュウツと抑えている。いや、飛ぶてアンタ。

俺達ハタチ組は今起きたが、琴はその前に起きていたらしく、柿を剥いて喰っていた。

サランラップした二人分が、机の上に置かれていた。

客が来ているときの琴は、やけに気が利く妹だった。

「あー、琴ちゃんやめてー」

「さあ、喰え！ 喰うのだくろたん！」

「うあー。かむかむかむかむ」

柿の皿を片手に、寝ているくろたんに馬乗りして、柿を突っ込んでいた。

親しい相手に対しては、微妙かな。

「あ、そうだ琴。俺みかん買ってくるから、留守番してて」

琴が不満そうに、口をアヒルにする。

「くろたんが具合わりいんだから、しょうがないだろ。リンも頼む」
「ういっすー。あとは任せてくたせえ」

「んじゃ」

「あ。お兄ちゃん、年賀ハガキも買ってきて」

「ん、了解」

俺は家をあとにした。

留守番任されたので、今日の視点人物はあたし、リンに代わるね
ー。よろしく

琴ちゃんがコタツに入って、モクモクと柿を食べている。その横
に黒民先輩、あたしという感じで入っている。

「あはは。ご機嫌ななめだねえ、琴ちゃん」

「買い物行きたかったもん」

「痛い、痛いー」

黒民先輩の頬をつねる琴ちゃん。

柔らかそうだな。あたしも触ろう。

「うあー、やめてよ伸びるよー、あー」

おお、焼きたてのお餅みたいだ。

あ、お餅食べたい。

「琴ちゃん、お餅あるー？」

「あるよー」

「焼いてー」

「うんー」

台所に向かう琴ちゃん。

あたしは黒民先輩の顔で遊ぶことにした。

「や、やめて」

うわ。あご下、メチャクチャ伸びる。

「あー。あー。うう……」

うわー。黒民先輩可愛いー。

「リンちゃん、砂糖醤油派？」

「あー、なんでもいいよー」

「そっかあ。くろたんはー？」

「ま、まだ柿、食べてないから、うー」

「じゃあ、あたし黒民先輩の、食べていっすかあ？」

黒民先輩は、首を軽く縦に振った。

「あは。ありがとつす。黒民先輩」

「ん、ん。良いから、休ませて……」

「あ。あたし箸が欲しいな」

「分かったー」

『ちーん』

オープンから音がした。

琴ちゃんの持っている右手の二枚の皿に、お餅が三個ずつ乗っていた。左手の二枚には醤油……砂糖醤油が入っているみたいだ。

「あたしにもくろたんの分、分けといたー」

「あーなるほど」

だから量が一緒なのかー。

琴ちゃんがコタツに戻った。

「では、いただきます」

「いただきますー……熱い！」

「リンちゃん焦りすぎー。猫舌なんだから、ふうふうしないとー」
「あはは、かたじけない」

ふうふう。ふうふう。

「よっしゃいける！」

手でパンパン叩きながら若干冷ました。しかし、

「舌がつ！」

「もお、リンちゃん焦りすぎー。猫舌なんだから、もっともつとふうふうしないとー」

「ふぐぐぐつ」

下を向くと、コタツで寝そべって柿を食べる黒民先輩が、シャキシャキと音をたてていた。

たればんだとか、リラックマが頭に浮かんだ。

「ねえねえ、琴ちゃん」

「へー？」

はふはふと白い息を吐きながら、お餅を食べる琴ちゃんに聞いたことがあった。

いつもはあまり、二人きりになることがないから、聞いておきたかったのだ。

「琴ちゃんてさ、好きな子いるの？」

「へあああ？ あ、あ熱いつ！」

「琴ちゃん焦りすぎー。猫舌なんだから、ふうふうしないとー」
「むう。マネしないでよ。てゆうか猫舌じゃないし」

そう言つて、琴ちゃんは舌をベエツと出した。

あたしは無性に妹が欲しくなつたよ。

「じゃあ、あたしとか、みんなのことはどう思うー？」

「えー？ んー……そっちは？」

「教えてくれたらねー」

琴ちゃんは「んー」とお餅をグイグイ伸ばした。

「くろたんはマスコットかなあ。可愛いくて好き」

黒民先輩が、コタツの中に顔を隠した。もそもそと。

「小太郎ちゃんは金髪とかが綺麗で好きだけど、あたしに浣腸するのはそろそろやめてほしいなあ」

「あはは。エッチさん、だもんねえ」

「うんー。だめだねコッチンは」

「あはは」

「あつ。あと志太　しだ　クンも結構好き。ちょっと優すぎるけどね。この前のクリスマスも、小太郎ちゃんが熱出してたから、らしいし」

ああ、だからクリスマスに来なかつたんだ。

「じゃあさ、星葉ちゃんには何で態度変えるの？」

「……なんでだろ。分かんない」

琴ちゃんは、残り一個のお餅を砂糖醤油に付けた。

「……優しくしたら、負ける」

「へ？」

そして、砂糖醤油が垂れなくなるまで待っていた。

「ねえ。リンちゃんは、お兄ちゃんのことを、」

玄関の方から、ガチャガチャと音がした。

「おかえりっすー」

「おー」

先輩の手には、既に数個のみかんが乗っていた。

みかんは、旨いんです。

十二月二十七日。午後十一時。

「今日中に、年賀状書かなきゃヤバいわ」

と言って、琴が年賀状を書いていた。手書きだ。

あとちよつとで来年か……。

「来年の十二支って、なんだっけ」

「牛だよ、たしか」

「そうか。牛か」

じゃあ今、琴が書いているのは牛なのか。

牛って、しま模様だったんだな。

「お前、絵が上手いのか下手なのか、よく分からんな」

「ピカソ狙ってるからね」

「そうか。お前ならやれるよ」

琴が集中して書いている。俺はとりあえずみかんを喰う。

うまい、うまい。みかん旨い。

「何枚書くの？」

「十枚かな」

うわ。ガンバーなあ、コイツ。

「年賀状かあ。貰うのシユウさんから送られてくる程度だな。あとはリンか」

シユウさんとは、俺が書いた童話を出版してるとこの編集者のことだ。俺の担当編集者。

でも返事は書かないな。

「二十枚くらいあんだろ？ それ」

束になったハガキに目を向けて、琴に聞いた。

「あたしが三枚書いて、今一枚書いてるから、十六枚かな」

「俺も書くわ」

琴がこっちを向く。

「珍しい」

「たまには絵でも、描こうと思ひまして」

向かいの琴が、コタツを潜って隣に来た。俺は筆ペンを持つ。

「ふふ、お兄ちゃん絵え上手いもんね」

「まあまあな。でも牛か。どう描こう……」

「牛肉口ース描けば？」

おいおいおいおい琴よ。それは、

「良いねえ。実に良いねえ」

脂身の色ペンのピンクで塗りたくった。牛肉を真剣に描いたのは初めてだ。しかもローズ。

「くぷぷ！ ヤバい……ヤバいわソレ」

「旗も刺しところ。お子様ランチ風ローズ」
「ぶっ！」

ローズはシュウさんに……。

「リンにはホルモンを描こう」

「これ貰ったら、キツイわ」

確かにリアルだな。

「じゃあこのホルモンはあれだ。小太郎にでも宛てところ。で、俺は可愛いホルモンを改めて描く。ホルモンちゃんだ」
「もお、ホルモンじゃなくて良くね？」

目を付けよう。大きい目。

んで、鼻。小さい鼻。

口。タラコでいいや。

「うお。気持ち悪っ」

琴がもお、完全に引いていた。

しょうがないからくるたんに渡そう。

「じゃあ、リンには普通に牛描いとくか」

「落ちるところに落ちたねえ」

「つーか、お前も自分の描けよ」

「はうっ!」

「うあー」

琴がぶっ倒れた。年賀ハガキ九枚目を手にしながら。

「やっぱ、こういうのは疲れるわー。はああっ」

面白いのは、描き始めだけだもんな。

「ね、ね、年賀あ。年賀ジョー!

正義の味方、年賀ジョー

とうるとうるしゃっきん」

相変わらず、シユールすぎる。

ガチャ、ガチャと、扉が開き、閉じる音がした。玄関の方からだ。

ダダダダダダダダダと、リビングに駆け寄る足音。

「スーパーアイドル星葉ちゃん、見参！」

設定多いな、お前。

そして露骨に嫌な顔を、以下略。

「年賀ハガキじゃん！ 年賀書いてんの？」

「うん」

「あたしの分は！」

「ねえよ」

『がーん』という音がした気がした。

最後に書くって言ってたな、確か。

「うそだあ、うそだあ！」

コタツの上のハガキを、一枚一枚手に持って確認する星葉。

「見るなああああ」

琴が星葉に肩パンした。

「ぎょへああああ」

星葉が俺の顔の上に倒れた。は、鼻が。

俺も星葉に軽く肩パンした。

「なあああああう」

コタツの上に倒れて、もがく星葉。

「ボス！　なんてこったい！　女の子を殴るなんて」

「いやいや、お前は女の子じゃなくてアイドルじゃん」

「いやいや、アイドルに女の子もいるよ！」

「いやいや、お前は妖精だからメスだよ。だから大丈夫」

「なにがさ！　なにが大丈夫なんさ！」

琴がコタツの上に立ち、ファイティング・ポーズをとる。

「うおうあああああああ！」

琴が背後に『オーマイガッツ！』の文字を浮かべながら、頭を抱えて、膝立ちでこっちを見て叫んだ。

「ハガキイイ！　ハガキイイああー！」

よく見ると、星葉の足元にハガキがある。

クシャクシャ……いや、グシャグシャになっていた。しかもちよつと破れているようにも見える。

「あ、あ、ボロボロ！　ボロボロやん、ほらあ！」

「いやあ、ゴメンゴメン。気付かなかったよ、はっはっはっはっ」

「いや、さすがにその態度は無いわ」

と突っ込もうとしたが、半分は俺のせいなのでスルーした。

うまい、うまい。みかん旨い。

「ああああああああ」

琴が泣きながら、星葉をボッコボコに殴る。

「ああああああああ」

星葉も泣きながら、反撃する。

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

「ああああああああ」

うまい、うまい。みかん旨い。

マイペース、スタイル。

十二月二十八日。午後三時。

シュウさんがウチにオジャマしていた。担当編集さんね。

「……ということがあって、今日は琴、すねちゃってるんです」

コタツから頭だけを出している琴の、後ろ髪を撫でながら俺は言った。

「あ、そなの？ そらキツイわにあ。原稿グシャグシャにされるやうなもんやものね」

コタツの上のみかんを口にしながら、苦笑いのシュウさん。

シュウさんは二十五歳なのに、年上風を吹かせない女性だから、話しやすくて割と好きだ。

ただ、コレは何弁なんだろうか。不思議オーラがプンプンと匂う。

「はあああ。でもワイも、クリスマス来たかったにん」

急に話しを変えるのが、クセらしい。

「仕事あるから、しょうがないですよ」

「でもにい？ クリスマスまでハゲ上司と一緒にたまんよ。セクハラは若いのにされたいよ。若いエキス欲しいわにあ」

軽く言ってること、危ないな。

「じゃあ、来年からズラしてクリスマス会しましょう」
「マジい？」

目がキラキラ輝く、シュウさん二十五歳。

「ありがとう、先生！ 先生に逢えて良かったに！」

「あはは、いえいえ」

「あ、ついでに男も」

「紹介しましょう。エロいのを」

「うえーい。分かってるなあ、このこぬう！」

向かいで空肘打ちするシュウさん。

紹介するのは、小太郎でいいだろ。

しかし、美人なのに何故モテないのか……。

黒の長髪に赤縁メガネを掛けていて、鼻筋が通っていて、知的に魅せる切れ長の目。ふっくらとした唇。完璧だと思うが。

やっぱ性格か？ ワイルドだもんな。

「ああ、暇やわあ」

シュウさんはコタツの上に、上半身を倒してダレた。

「つーか、今日は何しにきたんですか？」

「んー？ そらあ休み明けの仕事の話をしにさ」

そういうのは、前もって言ってくれ。

「でもダルんから、今日は、やば良いわ。一月四日辺りにまた来る
によー。なんかプロット作っというてー」

あんたは宿題をサボる中学生か。

「つーか、休暇貰ってるんですよ？ 俺」

「ゲームしよー？ Wiiとかないの？」

「ありますよ」

シュウさんが、ガバツと起き上がった。

「マリカ（マリオカート）は！」

「ありますよ」

シュウさんが立ち上がった。

「よし、やろっ！」

琴が立ち上がった。

「あたしもやる！」

ストレス溜まってんだなあ。目が燃えてやがる。

「あ、どうせなら四人でやらね？」

玄関にて。

「お、オジャマします」

くろたんを呼んでみた。

（小太郎は熱が引いてなかった）

くろたんは、シュウさんとは初対面だ。

「え、あ、はじめまして。黒民みひろ、です」

と、軽く噛んでから、くろたんは頭を下げた。

うわーお。横に赤縁メガネに勝る赤さの鼻血垂らしてる人いるよ。

ぼとぼと落ちてるよ。

『ちよい、ちよい』

おっと。シュウさんが手招きをしている。

「ちよ、先生、ヤバいあの子！ 可愛い！ 可愛いすぎー！」

ぶばっ！　ぶばっ！　鼻血が吹き出るシュウさん。

うん。落ち着こうね、シュウさん。

「あ、の、大丈夫ですか？」

くろたんが、ポケットティッシュを取り出した。そんなもんを常備してんのか。

「あ、ありがと、みひろちゃん」

受け取るシュウさん。

「あ、はい。あ、鼻血落ちる！」

木床に落ちた。なんてこった。

くろたんが、シュウさんが床に落とした鼻血を、ティッシュで拭いた。

「あ、う。ご、ごめんなさい」

涙目で謝るくろたん。何故くろたんが謝るのだろうか。

『ちよい、ちよい』

おっと。シュウさんが手招きをしている。

「どうしたんですか？」

「はあはあ、先生。みひろちゃんを狩っていい？ はあはあ」

耳元で『はあはあ』しないで欲しい。

「勝手にしてください」

「言ったね？ はあはあ、ホントに勝手にするからね？ はあはあ」

ああ、コレだからモテないのか。

新たな残念な発見だ。

鼻にティッシュを詰めるシュウさん。

「みひろちゃん」

「え？ あ、はい」

胸元のボタンを外すシュウさん。え？

「う、わ、な、な！」

「みひろちゃん」

と言いながら、くろたんを胸に押し付けた。

「あ、ん！ な、なにを、ん！」

「みひろちゃん、ワイと遊びましょうやあ」

なんてこった。くろたんが犯される。

リビングの方からダダダダダダと、近づいてくる足音。

「お兄ちゃんたち、遅いよー。なにしてんの？」

うわーお。なんてタイミングの悪い。

「あれ？ なにしてんの？」

「ん、ん、琴ちゃ、ん！」

シュウさんが背を向けていて、ちょうど分からなくなっている。
よし。

「ちょっと。リビングで待ってようか、琴」

「え？ え？」

とりあえず、琴をリビングに戻しに、俺はリビングへ向かった。

「ん、んー！」

「はあはあ、そんな、暴れないで！」

毒牙にハマるくらたんの叫び声を背に浴びながら、俺は一時、去った。

昨日、ちゃんと謝れなかった星葉ちゃんが、勇気を持って謝りにいく為に、視点を星葉ちゃんに代えます！

とゆう事情のもと、私は今琴さまの家の前に立っている。

いつもは、ふざけ謝りしかないが、さすがに昨日はやりすぎたと反省しているわけで、ちゃんと謝ろうとしているわけだよ。

緊張しすぎて嚙んでしまったよ。

玄関ドアの真ん前まで来たよ。

「や、やあああ……」

「はあああ、可愛い……。ふふ、良い声で鳴くのね、みひろちゃん……」

なんか色々とヤバい匂いをするのは気のせいだろうか。

その気のせいのせいで、あたしはドアを引けないわけだよ。

「あれー？ 星葉ちゃんじゃん」

むむつ。このユルい声は、ましかか！

背後の気配のさきのさき！

「リンちゃん！ ゴメンナサイ星からやって来た星葉ちゃんです！」

「おー。相変わらず訳分かんないテンションだねえ」

「そうなのさ！ 訳分かんない奴なのさ！

そしてその、訳分かんない奴からちよっとう願いがあるのさ！」

「むむつ。どうしたのかな？」

キラリと光るは、眼前の彼女の眼光！

「いやいや、実は昨日かくしかじかがあってゴメンナサイがしたいというわけさ！」

「なるほどー。でも一人じゃ勇氣出ないから、あたしも一緒に謝れコノヤローというわけか」

なにいいいい。さっきの説明でここまで分かるものなのか？

リンちゃん……恐ろしい子！

「いいだろう。あたしに、任せい！」

あたしは先に行つて、良い雰囲気を作っておくよー」

「頼んだー」

ドアを開けるリンちゃん。

「なっ！」

手によつて閉ざされた、目先の視界！

「見ちゃダメ！ 子供は見ちゃダメ！」

「えっ？ えっ？」

この先に、一体なにが……！

マイペース、スタイル。（後書き）

お兄ちゃんによる、プロフィール変更。

8 - - シュウさん - -

変態。マイペース。

そらあ、モテないだろうよ。

- - - - -

ちょー雪合戦。

十二月二十九日。午後一時。

外では、大きな雪が降っていた。

「うわ、うわ！ お兄ちゃん、庭積もってる！」

ああ、まだ雪で騒ぐ、歳なんだなあ。あれ？

「何日か前と、リアクション違うくね？」

「えー？ いや、あんときは積もってなかったし。だから今日は外行こう！」

寒いってばよ。お前も寒い寒い言ってたじゃん。

俺はコタツでみかんを食べ続ける。

それを琴が奪って食べた。

「もぐもぐ。なにしてんの！ 早く外に出よう、お兄ちゃん！ もぐもぐ」

お前がなにしてんのよ。

「ああああ。こちよこちよ禁止！ こつちよこちよ禁止いいいい！」

けだるい、けだるい。

「やめてええええええ、漏れる！ 漏らす気か！」

俺はコタツに顔をうずめた。

「星葉とか呼べば？」

「ん。んー……」

「リンとくろたん、呼ぼうか？」

「わーい あ、志太くんも呼ぼう！」

「あはは。いやあ、雪合戦なんて久しぶりやわ！」

真白の庭で、白い息を吐きながら言う、リン。

ああ、やっぱりリンはこんなの好きなんだな。もお、十八歳なのに。

つか、こいつ高三なのに勉強しないでいいのか？

呼んだ俺が思つのもなんだが。

「さ、さむ、さむい」

真白の庭で、くろたんがフルフルと震えている。

冷え性だから余計に冷えるだろうな。

「はっはっは。雪星からの使者、星葉ちゃんに叶うものはいないわー！」

「いいや、あたしが勝あああつ！」

真白の庭で、叫ぶ星葉と琴。

よくネタが尽きないな、星葉。

「いくぜ星葉ー！」

「ほあー！」

『ゾバババババババババ！』

豪快だなあ、琴。

「なんのなんのなんのー！」

『しゅぱっ！ しゅぱっ！ しゅぱっ！ しゅぱっ！』

意外と丁寧な投げ方だなあ、星葉。

「はっはっは。軽い！ 軽いぞ雪星！」

「むむっ。まだまだまだまだまだああああ！」

リンは雪玉を作りまくっている。

くろたんは小さな雪だるまを作っている。

「みんな元気だな。みひろくん以外は」

微笑み紳士な小学五年生……志太が、微笑みながら俺の横で雪玉を硬くしている。

志太が来たということは、小太郎も大分良くなったということか？

そんな質問をしてみた。

「うん。もお大丈夫だよ、兄ちゃん。明日には、ここに来るかもよ？」

「そうか。また一段とウルサくなりそうだ……」

「ふふ、でもないといないで寂しいっしょ？」

真白の庭で、みかんを喰いながら、雪合戦を観戦しながら、俺は返答した。

「まーね」

愛くるしい微笑みを浮かべながら、志太は雪合戦に参戦した。琴側に。

リンは星葉側についた。

くろたんは小さな雪だるまを作り上げ、それよりも大きな雪だるまを作っている。

俺はというと、寒くなったのでコタツに入ってみかんを喰っていた。

時計を見る。今は三時か。

三時って、テレビなにも無いんだよなあ。

仕方ない。テイルズ・オブ・ハーツでもしよう。

なお、外では本格的に雪合戦が開始した模様。

「はあ ああ ああ ああ ああ ああ ああ！」

[illegible]

「くっく。じいじい！」

コレが伝説のガトリング・スノーボールかあ！

「いやだ、私も攻める！」

「聞き分けなさい！ アナタでは、勝ち目が、無いノデース！」

「ナイス、**琴**！ ナイス、**連打**！」

「志太クンの玉作りが早いおかげさ！」

「ふっ。名投手には、名玉職人だよ、琴！」

「よ、よし、中サイズ雪だるま完成。あとは大サイズを……」

「ぬおおおおおお。スターダストレビューション！」

「うわ、なんて大きさだ！　これが星葉ちゃんの本気か！　当たれば死ぬノデース！」

「受け取れ、琴！ あたしの精一杯……！」

『どばりいいいん!』

「琴、逃げるんだ」

「え、でも」

「はやあああああく! はっやあああああく!」

『じよばああああん』

「志太クウウウウン!」

「生きる……よ」

「志太クウウウウン!」

このボス弱いな……。――

「なにしてんのー、先生?」

寝そべって、プレイしていると、腹にシュウさんが「どすんっ」騎乗してきた。

痛い、痛い。腹痛い。

「なんでいるんですか?」

「なんで? ふっ。昔から言うでしょ。美女は神出鬼没って」

いや、初めて聞きました。

「ところで今日は、みひろちゃんに会いにきたんだけど、どこにいるー?」

「庭に居ま……いや、なんでここにいるの知ってんですか」

シュウさんは赤い唇をゆがませ、笑みを浮かべた。

「居る気がしたんゆ」

こえーよ。この人こえーよ。

「おおお、本当だ。ふわ！雪だるま作ってるう。はあはあ、はあはあ」

警察呼んだ方が良いのだろうか。

シュウさんが一直線にくるたんの方に全速力で駆ける。

くろたんが気づいて涙目になっている。

狩人だよ。ウサギを狩る狩人だよ。

拳銃を首根っこに押し付けて、ゼロ距離射撃するつもりだよ
アレは。

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあ」

「ぼくしゃあ
ああああつ」

琴の投げた強烈な雪玉が、

「へヴウウンッッ！」

シュウさんの顔面に直撃した。

そのままシュウさんは仰向けになって気絶した。

赤縁メガネが直撃の衝撃で外れて、空中でトリプルアクセルを繰り出したのち、地面に積もった雪の中にサクリと半分、埋もれた。

イツツ・ア・ノンリアルクオリティ。

みかんは旨い。

ここが一番落ち着く。

十二月三十日。

（今日を入れて）あと二日で、今年も終わりか。

午後一時。

「そいや、小太郎ちゃん今日来るんでしょ？」

「懐かしいっすねー。コッチン」

リビングで、琴とリンと俺がコタツに入っていた。

みかんは旨い。

そしてコタツから、小太郎が顔を出した。

「うわっ！」

琴がヒドく驚いて、口からみかんを落とした。

「よお、琴。あらっ！　しばらく見ないうちにキレイになって、まあ」

おばちゃんみたいな口調になっている。

「ど、どういっ……」

「お前がトイレ行ったあとに、ちょうど来たから、隠しといたんだ
「よ」

「あはは」

リンが笑っている。しかし目が笑っていない。

視線の先の小太郎の顔をよく見てみると、結構赤い。ずっとコタツの中に入っていたんだから当たり前だが。

ちょっとアザも出来ている。なんでだ？

「いやあ、待っている間ヒマだから、リンのふくらはぎ揉んでたさ〜……」

そういうことか。どおりで、リンの笑顔が引きつっているわけだ。

リン、若干、頬も赤い。

つか、最近セクハラを間近で見ることが多いな。

小太郎も、この軽い性格さえ直せばなあ……。

蒼い瞳、サラサラの金髪、白い肌、上質なハーフだからモテると思っただがなあ。

「あつ。そうだリン太。チョコケーキ作ってよ」

「へ？ …… ああ、良いっすよ。てゆか、リン太って言うなっ！」

小太郎の急な要求に、少し間を置いて、応えるリン。

「先輩も一緒に、しましょー？」

と言われたので、台所へと向かった。

アイツとリン太が料理してっから、視点は俺、小太郎になりますぜ。よろしく。

いやあ、やんちゃなリン太の、いざという時の女の子な反応は良いなあ。

ちゃんと応援していきたいわ。

「小太郎ちゃん」
「ん？」

天使声な琴が話しかけてくる。

「はい、クリスマスプレゼント！」
「お、おお？」

水玉模様のソレに、包まれた箱をくれた。

「この前来てなかったから、渡すの遅くなっちゃったけどね」
「はあー、良い子だな。琴」

琴がヒヒツと、イタズラっぽく笑う。

「開けていい？」

「いいよー」

包みに付いてるセロテープを丁寧に剥がして、開けた。

パープルの手袋だ。

市販っぽいのは、ちょっと残念だが、それでもくれるのは嬉しいわ。

手袋をはめて、琴の頬を撫でた。

「マジ、やべえよコレ。ありがとな」

「……来年は、作ったのをあげる」

「おっ。できるかな？」

「ふふ。ナメちゃあいけないよ」

「……なるほど。」

たぶん、アイツには編んだのをあげたな。

アイツ、モテるなあ。

「あ。実は俺もプレゼントがあるんよ」

「え？ なにー？」

おでこにキスをした。

「あう……っ。もおっ」

コタツにこもってしまった。

やべえ、可愛い。

「冗談だつて！ 出てきてよー」

「やあー、もお。すぐそんなことするじゃん！」

「ゴメンって。もうしないから！（今日は）」

「本当に？」

「本当にー（今日は）」

琴はコタツから顔だけを出して、俺を見上げた。

「うわっ」

そこに、カバンから出したモノを落とした。

「プレゼント。リーゼント・カピバラさん枕ー」

「うあー！ 可愛いー！」

琴は、パアツと明るい笑顔を見せた。

「ひひひー。来る途中、ユーフォーキャッチャーで取ってきたんだ
よ」

「おおおお。モッフモフじゃーん」

聞いちゃいないな。

まあ、喜んでくれてなによりだ。

「ありがとう！」

琴は白い歯を、ニカアツと見せながら、笑った。

喜んでくれてなによりだ。

「できたよ、二人ともー！」

おっ。リン太の声だ。

リン太がリビングのドアを開けて、アイツがケーキを持ってきた。

「お前が手を出したヤツか。喰えるかな？」

「なめるなよ。俺はケーキマスターだぜ、小太郎」

「ほお？ まあ期待してやるよ」

「はい、琴ちゃん」

リン太が皿を配り始めた。

「ありがとう」

「まいど」

じゃあ、ここは俺が言つとくか。

「手を合わせて下さい。はい、いただきます！」

「「いただきます」」

「小学生かよ」

「あたしは小学生だよ、お兄ちゃん」

「ああ、そうか」

「あたしも小学生っすよ、先輩！」

「お前は違うよ」

「俺も小学生、」

「へえ。そお」

冷たいっ！

その後、ケータイを片手に持ったアイツにバイバイを言って、七時ごろに家に着いた。

「ただいまー」

午後七時。帰宅。

「あー。お帰り、兄ちゃん」
「うん」

志太の部屋の、ホットカーペットの上に寝転んだ。

「はああああああ……」

「長い溜め息だね」

「ああ。やっぱりあの家は癒やし空間だなあってさ。久しぶりに行って、改めて感じたわー……」

「そっかー」

セクハラし放題だし。

「兄ちゃん、いつか捕まるよ？」

「そんなときは、お前も道連れな」

「いやあ、勘弁してくれ」

「ははは、あゝ……。おやすみなさい」

「へ？ ああ、おやすみ」

俺はだらけて、目を閉じた。

志太が読んでる、マンガのページを捲る音が聞こえた。

口の中では、まだ仄かに、チョコの匂いが香っている。

今年の終わり。(前書き)

この作品は、紅白戦前に作られたものです。
そのため、歌手の順番は現実と異なる可能性があります。

今年の終わり。

十二月三十一日。午後八時。

小太郎、くろたん、星葉、リン、志太、琴、俺がコタツの中に入っている。

さすがに狭いなあ。

そう思って俺は、コタツから出て、背後の黒いソファーに座った。

俺ん家では、コタツを中心にソファーが囲んでいるのだ。

俺が座っている場所の正面に、テレビがある。

テレビから一番遠いところ……俺に一番近いところに琴とリン、こちらから見て、その右横に小太郎と星葉、左横に志太とくろたんがコタツに入っていた。

テレビには紅白が映っている。

「ポルノってさあ、誰かに似てない？」

「ああー。ボーカルがさー、福山雅治に似てない？」

「いやいや、どっちかというとボスに似てるよ」

小太郎と志太と星葉がこっちを見る。

比べるな。俺をポルノと比べるな。

「おおー。なるほど」

「確かに」

納得してんじゃねえよ、その兄弟。

「歌、聞けよ」

「そつだよ。お兄ちゃんなんか見てても、時間のムダだよ？」

お前はお前で失礼だよ、琴。

リンもこつちを上目で見て、笑っていた。だから、比べるなって。

くろたんだけは、ポルノに聴き入っていた。

「すごいなあ」と呟いていた。

ポルノのあとに、聴きたいのじゃないのが出たので、その間に台所で温めている鍋を持つてくることにした。

（うちは片付けが面倒だから、カセットコンロは使わず、温めるのは家庭用コンロで、食べるときに持ってきて、鍋の下にタオルを敷く）

台所の方に行く。

琴がそれに気付いて、トコトコと付いてきた。

「テレビ観てりゃあ、いいのに」

「いいのー。あたしもアレには興味ないからね」

「ああ、そだったな」

おっ。水炊き、良い感じじゃん。

汁がこぼれないように、鍋を持った。慎重に持った。

「皿とタオル持ってきてー」

「ういー」

グラグラと、皿タワーを積み上げる。

「お、おおっ」

「二つに分けて、持ってくれば？」

「手伝おっか？」

志太が来た。

「いいの？ 志太くん」

「いいよー。あはは」

さすがは微笑み紳士。

音を少しも立てずに運んでいる。

リビングに鍋を持ってくると、寝転んでいたリンがガバツと起きた。

「水炊きー！」

星葉がガツ！ とコツチを見た。

「水炊きやー！」

小太郎も両手を上げて、

「水炊きいいいあああ！」

そんなに好きかコレ。

くろたんは目をキラキラさせていた。

凄い人気だ。

箸で鍋の中の手羽先をつつくと、良い感じに柔らかかった。

テレビではポリリズムが流れている。

「やっぱ、のっちが一番可愛いなー」

小太郎が鳥のぶつ切りから、身を剥がしながら、左手で頬杖をつきながら言った。

のっちって、どれだっけ？

「髪みじけーの」

「あー、可愛いな」

「あー、あーちゃんが好きー」

テレビに髪が長い奴が映った瞬間、リンが言った。

「リン太、なんで？」

「いやー、あの天然の訳ワカンネーっぷりがたまらんっすよー。ふひ」

リンが目をきゅうつとつむり、顔を赤くしている。

そういえばトーク、甘　うま　かったなあ。

……俺も好きだよ。

「は？」

「え、え？　なにがっすか先輩」

二人が驚いている。リンなんか、今にも溶けそうに赤い。

「あーちゃんが一番良いと思うよ」

小太郎がコタツに頭をぶつけた。

「あ、ああ！　先輩もっすかあ！　奇遇っすね！」

「ああ、あの天然なのが良いよね」

「お前……溜めて言ってんじゃねえよ」

は？

「つかさ、そんなのどうでも良くない？　歌聴こっすよ」

星葉が正論を言ったので、俺は少しビックリした。

二人も、そんな感じだった。

「ポリリズム ポリリズムー」

琴が身を揺らしながら、一緒になって歌っていた。

やっぱ上手いな。

くろたんは「すごいなあ」と言う。

その横で、志太が水炊きを喰いながら、琴が歌っている姿とテレビを見比べているようだった。

テクノが紅白出るの、初めてみるな。

十一時。紅白は演歌タイイムに突入したので消した。

七人が遊べるゲームの切り札は、トランプだなあ。

「こおさ、人数がクソ多いと、二酸化炭素溜まりまくって、ストーブ付けなくていいから便利っすよねー」

ババ抜きでダブったカードを捨てながら、リンが言う。

「俺は四人くらいが、丁度良いと思うんだけどなあ」

ダブリを捨てまくって、手札が四五枚になった小太郎が言った。
「どんだけダブってんだ。」

「じゃあさ、いつそのこと四人にしてみようさ！」

「どうやって？ ホシ」

志太が聞く。こちらにも、手札が少ない。

「一時間、五位から七位の人は喋らない！ 破ったら罰ゲーム」

ああ、そういうことか。

「良いねー。でも一人抜かそうね」

「へー？ なんでリンちゃん……あ」

リンの隣の、琴が静かな寝息をたてている。

そういえば、いつも十時半には寝ていたな。

お腹周りが、よく膨れては縮んでいた。

「こ、これは、良いな！ 反則だな！」

小太郎がなんか興奮している。黙れロリコン。

写メっていた。いや、写メるなよ。

「つーかさ、さっさやろうさ！」

星葉がコタツでスタンバイしていた。

手札がさつき見たときと大差ない。

ちよつと手札多いな。

俺は志太の次くらいに少ない。

リンも多い。

くろたんは少なくも、多くもないな。

まあ、俺が負けることは無いだろう。

「俺、あーがりっ！」

「俺も上がりー」

「あ、なくなつた」

「先輩と星葉ちゃんの負けー」

何でだよ。

俺は優勢だつたろうが。

「なんてこと！　なんてこと！」

星葉、自分で言つて負けてやがる。

「はい、しゃべんなよー」

小太郎が星葉の口を押さえる。

「リン太、罰ゲーム何にする？」

「くすぐり地獄とか？」

「それは、ありきたりだなあ。くろたんは？」

「え？ う、うーん」

「もお、兄ちゃんなら浣腸とかで良いんじゃない？」

微笑みながら、なんてことを言うんだ。つか、それはそれでありきたりだろ。

「良いねソレ！」

良いのかよ。

星葉が膝をカタカタと、ビンボー揺すりしている。

若いウチから、そんなことをしないでほしいよ。

『すう……すう……すう……』

横の、琴の寝息が聞こえてきた。

「今年こそ、今年こそ、年、越す！ いひひひひ……」

デカい寝言だ。

「あれはアリか？ 浣腸アリか？」

「いや兄ちゃん、さすがにアレはナシでしょ」

「ねー、マリカしない？」

最近是一緒に寝ないから、まじまじと寝顔を見るのは久しぶりだな。

琴の前髪を指先にのせる。

なんだか安心した。

星葉が琴の横に来た。

そして、琴の頬をぷにぷにと触った。

「んん……っ。……すう」

星葉がカラダをプルプル震わせながら、腹を押さえて、声を出すのをこらえていた。

本当に、アホだなあ。

触る速度が上がった。

ぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷにぷに！

「ふっ！ ふぎっぴ！」

口を閉め、鼻をつまんでこらえている。

ヤバいな。俺も、なんか耐えられんな。

ふぎっぴ！ て 안타。

星葉は琴の鼻をつまんで、頬を指で。

ぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶに！

「ひゅくんつぶ、ふんごー！ かつはかはふぼおおおおー！」

ああ、ヤバイ。笑う。笑いそう。

「ぶふううふううふうー！」

星葉が鼻水を垂らしながら笑っている。キタなっ！

「ぶ……っ。あっ」

しまった！

「リン太、俺が星葉をやるぞ！」

「よっしゃ！ じゃああたしは、先輩を！」

「兄ちゃんら、かましたれー！」

ちょ、おい、お前ら……。

「浣腸おおおおおおおー！」
『ずぼっ！』

「なああああああああうー！」

痛い痛い痛い痛い痛い！

「ほおおおおおおおお！」

「手加減！ 手加減を忘れずに、」

『ぞばあああんっ！』

「ふんぎゃあああああああう！」

「いやあ、さすが兄ちゃん。音も角度も違うなあ」

か、角度は関係なくね？

視線の端っこでくろたんがプルプル震えていた。

ツボか。ツボなのか、コレが。

こんななかでも、琴は一向に起きる気配は無かった。

『すう……すう……すう……』

時計は十二時半を回っていた。

年越し、かあ。

ぼうつと時計を見ていた。

すると、小さくてやわらかな、白い手が、俺の手を握ってきた。

俺は、冷えたその手を暖めようと、両手の平で包み込んだ。

「お前ら、ラブいね」

「いやあ、ここまでゾッコンだと何も言うことないっすねえ」
「ですねえ」

小太郎とリンがこっちを、ニマニマしながら見つめていた。志太は微笑んでいる。

「いやん。こんなお兄ちゃん、私も欲しいなあ！ もう！」

星葉がウキヤウキヤ騒いでいる。

こいつら……。

「う、うつせえつ。見んな！ こっち見んな！」

くろたんはプルプル震えている。

今年の終わり。
(後書き)

良い、お年を。

正月おもしれえ。

一月一日。元旦。午前十一時。

結局、琴はその時間まで起きなかった。

だから、コタツで寝たまんまだった。

「んん……」

「おはよう、琴」

目をゴシゴシとこする琴。

「……あれ。みんなは？」

「帰ったよ。二時に、また来るって」

琴はまた、コテンツと寝転んでしまった。

「ああ。寝ちゃったんだね、あたし」

はあああああ……と溜め息をついて、コタツにこもる琴。

「まあ、来年がんばりなよ」

「むう……」

「お雑煮喰おうや」

「食べるー」

琴のテンションがウナギ登りした。

どんだけ食い意地張ってんだ。

琴が何かを思い出したように、あーんと口を開いて、目を指で覆った。

「そついや今年……いや去年、お餅付いてないじゃん！　なんで？」

ああ、そつえば言ってなかったか。

「餅つき機、壊れてたんだよ」

「うおおおお。直しといてよ、もー！」

お前だって、今思い出したんじゃない。

「だから、今年のお雑煮には、市販の餅を入れる」

「えー」

「いいじゃんか。お前も普通に焼いて喰ってんだろ」

「はんつ。分かつちゃあいねえなあ、お兄ちゃん」

何をだよ。

「お雑煮は神聖なるもの！　普通のゴハンとか、お菓子とかと一緒にすんな！　作ったソレじゃないと、お雑煮じゃない！」

「そうか。じゃあ喰うなよ、お前は」

「すいません。いただきます。すいません」

「よろしい」

お雑煮の中の餅を探し出した琴。

目がキラキラしている。

「ほら、お兄ちゃん。このお餅すごい！ いっぱい汁垂らして色っぱい！ やん、セクシー！」

左手を頬に添えて、惚けている。どんだけ餅に愛を注いでいるんだよ。

頭は大丈夫だろうか、この妹。

一瞬、あの担当編集が頭をよぎったよ。ああは、なるなよ。

「つかソレ、市販だよ？」

餅に吸い付く琴。聞いちゃいない。

琴が餅を伸ばす。のびる伸びるまだ伸びる。

コタツ向かいの俺のところにまで、餅を伸ばす。こら。

「いい加減にしろ。俺が喰えんだろうが」

「ふああふあ。によいおによいお。ふああふあ」

なに言ってるかわかんねえ。

そんなときだ。琴が餅を引っ張りすぎて、バランス崩して箸を二本飛ばしてしまった。

一方は琴のお雑煮に入って、しぶきを立ててコタツのテーブルに水滴を何個か作った。

もう一方は俺の喉ぼとけに、ジャストミートした。ごはっ。

「ああ、お兄ちゃん！ ナニむせてんねん！」

このやろっ。さっきの奇跡を見逃してしまったのか、このやろおっ。

「いや、バッチリ見てた！」

コノヤロウ。親指たてやがって。コノヤロウ。

ああ、もお一時半か。

そろそろ来るかな。

スカートが輝きながら揺れた。

「宇宙中の誰よりもスター……星葉ちゃん、見参！ 今年も宜しく
ぴゃん」

きゅぴきゅぴきゃぴーん

うわぁ……今年もよろしく。

「うわぁ……」

琴よ、口に出しちゃあダメだろ。

「ハロー、inn！」

「なぁぁぁぁぁあう！」

小太郎の声とともに、星葉が絶叫した。

浣腸しやがった。見事に直線一貫きだった。容赦ないな。

琴がガッツポーズをしていた。

「明けましておめでとうございます」

横で一部始終を見た志太が、少しも動揺せずに新年の挨拶をした。

微笑み紳士、しっかりし過ぎだ。

「お二方、今年もよろしくね」

「あ、うん。こちらこそー」

志太がお辞儀をする。琴もつられ、お辞儀する。

「小太郎。あれがお前の弟か？」

「いやあ。俺も朝起きて、ホットコーヒー片手に、新聞を読むアイツを見るたびに疑問よ」

レベル高つ。

「ア・ハッピー・ニュー・イヤー！」

リンが来た。

こうやって見ると、リンが一番普通か。

時間がないから、くろたんは省略。

「ひ、ひどっ！」

「んじゃ、行きますか」

神社に着いた。ちょうど、時間は二時だ。

やっぱ人が多いな。

「つーか寒いな。マフラーだけじゃ足りん。来年は手袋作ってほしいな。」

「お。ほら、洗所ある洗所！」

琴が何かを指さす。そんな名前だっけな、あれ。

「じゃあ、手でも洗つところか」

リンが手を洗う。マジかこいつら。冷たくないのか。

小太郎と俺以外、全員洗ってる。

志太はハンカチで手を拭いてる。さすがだ。

「みんな真面目だなあ。俺は、手え冷たくてムリだわー」

小太郎が目を細めながら言う。視線の先には巫女さん。おい。

カランカランって鳴る、大鈴の前に立った。

賽銭箱が古臭い。

「お兄ちゃん、カネくれ」

「お前、自分のカネ使えよ」

十円を琴の手のひらに落とした。

「ありがとう」

もう一枚取り出して、俺は賽銭箱に投げた。

適当に手を叩いて、なんかに祈った。

目をつぶる。

ウエストポーチに入れたサイフを、取られる感触がしたので、目を開けた。

下を向くと、星葉が「あっ」て顔をしていた。

「ボス、あたしにもくれ！」

「盗もうとしたから、ヤダ」

頬を膨らませる星葉。

「志太っち、あたしに五百円恵んで」

高くな？

「しょうがないなー、ホシは」

あげよったわ。

「ありがとう」

星葉はソレを貰うと、自分のサイフに入れた。

それを見た志太が、星葉のサイフを奪って、五百円玉を取り出して、そのサイフで星葉の頭をバチンツと叩いた。

おお。無言ツツコミか。

ん。小太郎が巫女さんを見ている。じいっと見ている。

「小太郎、賽銭にカネ入れないの？」

「あー、うん。カネの無駄」

どケチかよ。

琴が腕を大きく振りかぶって、十円玉を投げた。

地面に思いっきり落ちて跳ねた。

相変わらずのノーコンというか、普通に入れば良いのに。

星葉がそれを拾って、賽銭箱に入れた。

「ああ。なんてこと、なんてことを！」

「あはは、ちっちゃいことは気にするな！」

「気にするわ！」

「胸がデッカくなりますよーに！」

よくそんな願いを、堂々と口に出して……。

「くろたんはなに願ってんの？」

くろたんが機能停止している。

頬をぺちぺちと叩いてみる。

「え、な、なに？」

「くろたんは、なに願った？」

「ん、んー……」

「世界平和」とかだったら面白いなあ。

「今年こそ、サンタさんに会えますように」

な、な、なに？

「おみくじ引こうぜー！」

ひも付きサイフをぶんぶん振り回しながら、小太郎がニヒニヒ笑いながら言う。

「カネの無駄じゃねえのかよ」

くわっ！ となる小太郎。

「あほか！ おみくじは面白いから、無駄じゃねえだろ！」

基準が分かんねえよ。

「お兄ちゃん、カネ」

「ボス」

「先輩」

「……たくつ」

俺は五人分のおみくじ代を、サイフから出した。

「……え？」

「くろたんの分な」

「……あ、ありがとう」

くろたんが申し訳なさそうに笑いながら、受け取った。

小太郎と志太は普通に、自分で払っていた。

「中吉かよー」

眉間に雷ジワを寄せる小太郎。

「コタくん、中途半端すぎー」

「うつさいわ！ 星葉はどうなんだよ」

「今から見るのさ！」

おみくじをペラリとめくる星葉。

「あつ」

「何だった？」

「いや、まあ」

「貸して」

「あ！」

俺は小太郎と話している星葉の背後から、おみくじを奪った。

「ナイス！ なんだった？」

「言っなああああ」

「小吉」

「ぶふううつ！ しょぼっ！」

星葉が小太郎をポコポコと殴る。

でも、結構良いことが書いてたな、星葉の。

今の自分を変えろ、ていう内容だ。

これを機に、星葉が変わってくれりゃあいいなあ。

ちょっと、うるさ過ぎるし。

「あはは。元気だねえ、兄ちゃんとホシは」

「お前はとうだったんだ？ 志太」

満面の笑みでおみくじを見せる志太。

「そ、それは……！」

凶。

「う、うん！ まあ、良いことあるよ、志太っち！」
「そ、そうだ！ 中途半端じゃないだけマシだぞ！」

微妙にフロアになってないぞ、小太郎。

「あはは。ちょっと、トイレに行ってくるね……」

微笑み紳士は、トイレに消えた。

なんか、背中に哀愁が漂っていた。

「リンはどうだった？」

「吉っすよー」

……普通だなあ。

「ええ！ ダメっすか!？」

「いや悪くないよ。ただ、普通の奴が殆どいないから（俺含めて）、お前がいると安心するって意味だよ」

「あはは、なるほどー。よし！ 存分に安心して下さいっす!」

そう言って、リンは思いっきり頭を下げた。

……やっぱこいつも変だなあ。

「大吉だあああああああ!」

琴が叫び声を上げ、ガッツポーズをしまくっている。

「あはは。琴ちゃんて、お出掛けのときのテンション、スゴいっすね」

言われてみれば、確かに外で遊ぶときの琴はウキウキしていた。

本当にぐうたらなのは、俺だけかもなあ。

あれ。

くろたんが機能停止している。

「おみくじどうだったんすかー？ 黒民先ぱ……」

リンがくろたんの頭をなでなでした。

くろたんはしゃがんでしまった。

うわ。案の定、大凶。

大声で喜ぶ琴が、皮肉にしか見えなかった。

「先輩は何だったんすか？ おみくじ」

「あー、まだ引いてない」

「えー。早く引いてくださいよー」

「あー、はいはい」

俺は、おみくじ箱に手を入れた。

はっはっは。なすびだよナスビ。

俺のコタツ向かいにナスさんがいた。

座高は俺と大差ないらしく、目線も合っている。

紫色の筋肉ムキムキボディを、テカテカと光らせながら、悶々と何かを考えているようだ。

俺がみかんを喰い始めると、ナスさんもみかんを喰い始めた。

「最近ね、景気が悪くてね」

ナスさんは、眉を細めて溜め息を尽きながら続けた。

「子供達なんかボクを見ると

『吐き気がするー』とか言ってさ、ボクの新品の靴下の中にゲロ吐いてきたんだよ？」

酷いと思わないかい？」

「酷いですね。けしからんですね」

「そうだろう？ 冗談じゃないんだよ！」

ナスさんは、コタツを『バンッ！』と叩きながら、みかん一個を丸ごと口に放り込んだ。

「くっちやくっちや。

まったく。

くっちやくっちや。

こっちは冗談じゃないんだよ。

くつちやくちや」

みかんを次々頬張るナスさん。

音が凄まじい。

やけ食いだ。

「ナスさん、ナスさん。あまり喰いすぎると、カラダにオレンジですよ？」

「なにを言ってるんだキミは。あっ！」

ナスさんのカラダの色が、みるみるうちにオレンジ色になっていく。

「ああっ。確かに！ カラダにオレンジ……いや、カラダがオレンジだあ！」

「でしょ？ でしょ？」

そこまで納得されると、こちらも鼻が高い。

あっ。俺の鼻が高く高く、上に向かって伸びていく。

これは大変だ。あっ。コタツの上にハサミがある。

ハサミを持った。鼻を切った。

鼻がコタツの上に落ちて、ビクビクしている。

良かった、良かった。俺の鼻はもとのサイズに戻った。

「くそお。くそお。このままじゃ、ジェノサイド・ヴァイオレットの称号が！」

ナスさんが自分の色に、困惑している。助けなきゃ。

「待ってて下さい、ナスさん」

コタツの中から、温めていた紫の野菜ジュースとコップを取り出した。

「飲んで下さい」

「おおっ。これがあれば！」

ナスさんは紫の野菜ジュースを、コップに注いだ。

『パリリーン』

コップが割れた。

「力強く、注ぎすぎたな」

ナスさんは反省した。

そして、紫の野菜ジュースをパックごと飲み込んだ。

「ふんっー！」

ナスさんの色が紫色になった。

ナスさんは見事に焼きあがった。

コタツの上から、はみ出さんばかりのナスの丸焼きだ。

「やっとできたんだね、先生っ！」

シュウさんがコタツ向かいから、話しかけてきた。

「シュウさんのために焼きました。食べて下さい」

「シュウさんのために焼かれました。食べて下さい！」

ナスさんがビチビチ暴れながら俺のマネをしてきた。

シュウさんはフォークでナスさんを刺す。

刺す！ 刺す！ 刺す！

「ふふひ、刺し心地良いわらあ！」

ナスさんが紫の血ヘッドを吐きながら、満面の笑みだ。

シュウさんが口から懐中電灯を『ぼとっ』出した。

それをナスさんに向けると、ナスさんは小さくなった。

「スモールライトなんよえ」

シュウさんは、ナスさんを口に放り込んだ。

シュウさんの口の中から『ひんぎゃあああああ』という声が

聞こえてくる。

ヘリウム吸ったあとみたいな声だ。

「さて、先生。ワイはメガネ、付けてたほうがええ？」

「そうですね。唯一のメガネキャラですし」

「ふふひ　なら付けたまま、食べちやるね」

「え？　なにを？」

「みなまで言わせんでっちい」

俺の耳元に『はあはあ』と息がかかる。

「逃がしませんえ。せーんせつ」

ネコとか犬を撫でたがる、子供のような、イタズラな眼差しを向けられる。

俺の耳の穴は、シュウさんの舌に塞がれた。

クチュクチャと音がした。

「う……あ……」

……あああああああ！！！」

胸元が、汗だくになっていた。

夢か。夢かよ。夢で良かったよ。

つか初夢がこれか。うあ。もお。

ケータイを開く。

一月二日。午前十一時。

「ふう……」

パジャマのまま、自分の部屋で寝ている琴を起こしに行った。

布団にこもっていた。シエル。

「ふぎー。お兄ちゃん……のエッツイー……」

寝言をスルーして、琴の頬をペチペチ叩く。

この時間なら、これで起きるだろう。

まぶたをこすりながら、琴が目を覚ました。

「琴、朝だ。起きろ」

「……ふーん？ お兄ちゃんがキスしてくれたら起きるかもー、え

へへ」

ああ。寝ぼけてやがる。

デコピンした。

「いったああああ?!」

お。起きたな。

「琴、おはよ」

「あ。おはよーざあす」

「顔、洗ってこい」

「あ。はい」

琴の寝癖の悪い髪の毛を、ポンポン叩いてから俺は、台所に向かった。

冷蔵庫の中を覗くと、一番始めにナスが目に入った。

朝飯は、ナスの肉詰めハンバーグにしよう。

そう思いながら、コンロを点けた。

青い炎が、灯る。

おっ。年賀状来てんじゃん。

一月三日。午後一時。

ポストを開けると、年賀状が入っていた。

俺の分は、四枚か。

リン、小太郎、くろたん、シュウさん。

やっぱ書いた分しか来ないな。

小太郎が送ってきたのは意外だが。

俺はコタツに戻り、じっくりと見ることにした。

「おっ！ 年賀状じゃーん」

寝ころびながらDSをしていた琴が、ワクワクが止まらない！
みたいな目で、こっちを見てきた。

琴の分を渡した。

せっかくだから、小太郎のを始めに見よう。

ペラッと、ハガキ裏を見る。

トグロを巻いたアレが、描かれていた。

横に筆で『牛糞』と、力強く書かれていた。

達筆なのが、妙にムカついた。

まあ、ふざけて描いたのを送ったんだから、しょうがないか。

そう思いながら、ハガキをビリビリと破いた。

そして、みかんの皮の上にのせた。

「さ、さすがにヒドくない？」

さて。

次はリンが書いたのを見た。

裏には『牛？』が描かれていた。

え？ これ牛？ だよな？

ぶち柄だから、牛だろう……たぶん。

琴がそれを見て、爆笑していた。

お前、しましま……。いや、まあいいや。

次にくろたんのを見た。

なんとまあリアルな牛だろうか。線が細かくて、渋い。

「はー。くろたんって、ホント芸術家だねー」

イラストレーター目指してるらしいしなー。

「顔も可愛いし、あとはあのトロトロ加減治せば、モテると思うんだよなあ」

みかんを喰いながら、ダラダラとそう言った。

「ダメだよー。くろたんはあのとろけた感じが可愛いんだから！」

ああ、まあ確かにそうか。

「うん、そう」

「……」

「……………」

「シュウさんの年賀、見ようか」

「うん」

ペラッ。

ローズのステーキが描かれていた。

「お、おお……」

「すげーよ、シュウさん」

見直したよシュウさん。

あなたはよく、分かってらっしゃる。

ロースの横に『あけしまりがとん』と書いていた。え？

琴に届いた年賀も見てみた。

志太、やはり奴は完璧だった。

写真かと見間違っほどに、綺麗に澄んだ富士山の絵だった。

完璧すぎて、なぜか逆に笑えた。

「いや、それは失礼じゃ……」

星葉の年賀。二等身のカラダも顔も丸々としていて、顔が（
）こんな感じだった。

背景では やら やらが沢山散りばめられていた。

やけに可愛らしいな……。

琴は無反応のまま、他のハガキを見始めた。

「おっ。山ちゃんのだ」

山ちゃん……か。懐かしいな。

山ちゃん……山下。琴の友達。昔は、よくウチに遊びに来ていた。

でも、引越してから、もう全然会っていない。

「懐かしいなあ、山ちゃん……」

……そうか。

年賀状は、こういう関係を繋げ続けてくれる、橋なんだな。

その年賀状には、二足で歩く人型の牛が描かれていた。

目がキラキラ輝いていて、ちょっと怖かった。

相変わらず、すげーセンスだ。

くろたんから、琴にも年賀状が届いていていた。

琴の似顔絵が描いてあった。

「うわー、似てるなあ」

確かに似てる。けど、なんで似顔絵？

「あー。あたしがくろたんの似顔絵、描いて送ったからかなあ？」

「マジで？」

「マジで」

もつと、ちゃんと描いてるところを観察すべきだったなあ。

琴の似顔絵の、大きな目を見ながらそう思った。

リンからも届いてあった……まあ、絵については語るまい。

琴がそれを見て、また爆笑していた。

だからお前、しましま……。いや、まあいいや。

小太郎のも届いてあった。

あいつ、年賀状出す人間なんだなあ……。

昨年までは、自分で年賀を出してなくてか、興味無かったから、気付かなかったが……。あいつは毎年書いてたんだなあ。

何気に年賀状を書くのをサボってるのが自分だけだと知って、驚いた。

まあ、俺の周りにたまたま多いだけ、だろうが……。

つか、小太郎が琴には目がハートの牛を届けているのが、なんか面白くなかった。

「琴、これ破っていい？」

「妬くなよ、お兄ちゃん」

「むう……」

「琴、お年玉やんよ」

「おー」

コタツに入っている琴の横に入って、お年玉袋を頭の上に落としました。ちよつと遅くなったけど。

「い！ 一万円！」

中を覗く琴。

「親戚少ないからなあ。お前も今年で六年生だし、それくらいやるよ」

琴がジワジワと、金からこちらに視線を向ける。

「お兄ちゃん、ありがとー！」

琴は横腹に、思いつきり抱き付いてきた。

当たりが良すぎて片腹いたいわ。

「無駄遣いすんなよ」

言つと、琴がニカアつと見せて、俺の腕をギュツと掴んできた。

「分かったー」

俺も、相当甘いよなあ……。

午後二時。

「ういーす。遊びに来たぜー」

小太郎か。

「おつ。年賀状じゃーん ……ん？」

小太郎はみかんの上の、あの残骸に気付いたらしく……

「チョアー！」

俺の頭にチョップした。いつてえ！

「なにすんだ！」

「こっちのセリフだ！ やぶんなや！」

「ならンーコとか、汚いの送んなってんだよ！」

「テメーが言うな！ ホルモンが！」

「ああん？」

「あああああん？」

俺は上着を脱いだ。

「決闘だ」

「はっ！ やけに熱いなテメー」

ステップ、ステップ。トントン、トントン。

「おらあああああ！」

「あちよおおおお！」

「なんだこれ……？」

琴が苦笑いしながら観戦していた。

まあ、あれだ。たまには暴れたいときだつてあるのさ。

オマケ劇場。

スマブラを知らない人には、申し訳ないネタを披露します。ご了承ください。

小太郎がみかんを食べながら、片手でスマブラをしていた。琴は惨敗だ。どんだけテクってんだ。

「ふはは！ 俺のマリオには何ビトたりとも勝てぬわー！」

「くっそお！ ビーチが！ あたしのビーチが！」

琴がコタツの中に入っていじけた。

俺はヨッシーを使って戦う。マリオの後方からタマゴを投げつけまくる。

『はっ！ はっ！』

「てめっ！ うっぜ！ うぜえー緑の恐竜がつ！」

バカやろう。ヨッシーなめんなコノヤロウ。あ。

『いんでいごーう』

更に俺の後方からルイージが！

ロケット頭突きをしてきた。

『はわわわわわわわわ！』

ヨッシーは、星になった。

さっきこつそり来ていた完璧超人、志太の攻撃である。

「永遠の緑の弟……なめてもらっては困るね」

くそ、なんてことだ……。

つか、みかん喰いたいから抜けよう。

「なにい！ 腑抜けかテメー！」

「小太郎。お前らほど、俺は強い人間ではないのさ」

「なにい！ そうだろう！ 俺は強い！」

「俺には負けるよ、兄ちゃん」

にこりと微笑む、微笑み紳士。

「なにい！ ならばやり合おうか！」

熱い赤の炎と、クールな緑の炎がぶつかり合う。

窓から見える空は、薄桃色である。

正夢だけは阻止せよ。

一月四日。午後三時。

「ワイが来たつしゃよ、先生―」

シュウさんの声が玄関から聞こえてきた。

「じゃな」

『え、え、今の声!』

ケータイを切った。

あの野郎は気付いてやがるらしい。

琴は出かけている。

シュウさんに実際に会うのは、久しぶりか……。

あの夢を見てからか、少し目を合わせづらい。

「久しぶりですね」

だから、俺はみかんに視線を向け、剥きながら言った。

「ん、先生? どしたぬ?」

「何がですか?」

みかんを剥く手の甲に、細く白い指がつつつと軽く触れてくる。

「先生は、みかんを見ながらは剥かないのう？ 人とか見ながら剥くよのう？」

シュウさんが、俺の横で問いかけてきた。

「たまには良いじゃないですか」

何を言っただ、俺は。

「ふーん？ なんか今日の先生、可愛いのー」

「は、は……？」

「だよ。ワイと寝らんない？」

なに言っただ、この人。

「仕事の話、しましょう」

「うわ。顔、真っ赤やんに」

熱い顔に、冷たい指が触れてくる。

あれが、正夢になりそうな気がした。

だから俺は、迫るシュウさんに軽く肩パンをして、避けた。

「いったあ！」

「シュウさんが、いきなりこっちに迫って来るからですよ」

俺の口は、冷静に動いていた。

「ふふ。だって今日の先生、本当に可愛いえ」

「うるさいですよ。仕事のこと言っして下さい」

「先生が何で照れてるのか、教えてくれたらね」

そんなしょうもないことを、言えっというのか。

まあ、しょうもないことだから言えないのか。

「キスしたいなあ……」

言っよ。言いますよ。

「夢で、シュウさんに襲われました、からです」

「はあ……はあ……」

シュウさんの吐息が、唇に触れる。

肩パン。

衝撃で、メガネがコタツの上に落ちた。

「いったあ！」

「話、違いますよ」

「残念……」

そう言って、コタツの上のみかんを一個取って、リンゴを剥くようにみかんの皮を剥き始めた。

「つーか、くろたんにあんなことしたくせに、俺にも色目使っちゃ

ダメでしょ」

「そだねー」

「他の誰にもしちゃダメですからね」

「そだねー」

「聞いてないねえ。なんかドラマの、怠け者の息子を叱る母親の気分だよ。」

「……いつか捕まりますよ、シュウさん」

「そだねー」が聞こえなかった。あれ？

シュウさんがみかんを一個、口に放り込んでから言った。

「……つかまりたいねえ」

シュウさんの切れ長の目が、潤んだ光を魅せた気がした。

「シュウ、さん……？」

シュウさんは、下を向いたまま、メガネを右手でガシツと掴んだ。

「シュウさん……なにかあったんですか？」

シュウさんは、そつとメガネを……

俺に掛けた。

「おおおお、似合うにい」

「こ、この……」

「ふひ　なに？　どしたん？」

「言わないんですね？」

「はんつ。なにもないですよ！」

「ふひひー」

「なら聞きませんよ。」

「ああ、もお。来てから何分経ってんですか。早く仕事話、始めましょう」

「そだねー」

「こ、この……」

「さて！　新作のプロット教えてよ」

「はいはい……」

「ネタノートを取り出して、考えたプロットを見せた。」

「シュウさんはノートを手に持って、ノートを見ていた。」

「赤縁の、度の強いメガネは、俺に掛けられたままだ。」

「強すぎて、目が痛かった。」

「どれか、気に入ったのありますか？」

「つわわわけー、アヒルさんのサンバの話とか良さそうだのー」
「あれですか。一般受けしないと思いますが」

赤縁メガネをクイツと上げるシュウさん。

「まあー、良いじゃん。今はもお、童話は大人のもんなのよ」
「分からんでも無いですけど、これは先鋭的すぎますよ」
「じゃあこれ、休み明け二週間で書いというてー」
「はい、分かりましたー」

『ピーン、ポ、ーン』

お。

この途切れ途切れなインターホンは。

シュウさんがギリギリと、目を輝かせている。

さすがは直感とかで、居場所を察知した人だ。

玄関を開ける。

「やあ、くろたん」

「うん」

居ると分かってて来るから、エライな。

ちなみに。

俺の背後には、シュウさんが隠れています。

いやね、大分前に呼んでって頼まれてたのよ。

正確に言えば二十日に。

「みー……」

くろたんがビクつく。

$$\begin{array}{c} \neg \\ \cup \\ | \\ \vdots \\ \neg \end{array}$$

俺の袖をチンマリと握ってくる。

そういうのはせめて、性転換して出直してからにしてほしい。せめてね。

[illegible]

ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ

猪突猛进。

その脅威に、袖を握られた俺も正面から受けた。

つ、
つ、
つおい。

ひんぎゃあああああ。

午後六時半。シュウさんは五時ごろに帰った。

「ただいま」

琴が帰ってきた。

「おそいよ」

「じゅめん、じゅめん」

俺のコタツ向かいに座る琴。

コタツの中で俺の太ももに、冷たい足を押し付けてきた。

「あつたけー」

「冷たいよ。やめろよ」

「やだよー」

やめる気配がまったくない。

琴はみかんを剥きながら、テレビを点けた。

「今日、誰んちに行つてたんだっけ？」

「んー？ シバちゃんのこと……ああそうだ、ちょっと星葉がなんか、やばくなつてたよ……」

「は？ なんで？」

「いや、ヤバかった……。ウザさレベルが恐ろしく上がった」
「そうか」

あれ以上だと、どうなるんだろう。

「テイルズでもするかー」

と言って、琴は俺の隣に来て、俺の太ももを枕にした。

「あれ？ そういやゴハン作る時間だよ？ お兄ちゃん」

下から聞こえてくる声。

俺はおでこを撫でながら、琴に答えた。

「今日は、作ってくれる奴がいるのよ」
「へ？」

「出来たよ、琴ちゃん」

カレー鍋を持って、くろたんが現れた。

「今日、くろたん泊まってくから」
「おー まじでー？」

くろたん、黒のエプロン似合うなあ。

「今日、一緒に寝よーね、くろたん」
「え、え、こまるよ、琴ちゃん……」
「つかお母さんになってよ、くろたん」
「え、え！？ こまるよ、琴ちゃん……」

オロオロしてる。

ぷぷぷ。

「じゃあ俺の、お姉ちゃんになつてよ」
「え、ええ。えええ！？」

いやいや冗談だよ。なんで顔赤いんだよ。

「さ。喰おうぜー」
「いただきますー」
「あ、いただきます」

キラキラお兄ちゃん。

一月五日。午前十一時。

俺とくろたんと琴はコタツに入って、マリオカートしていた。

「あはは、くろたん弱ー！」

「うー……」

悔しがるというより、落ち込む感じの声を出す。

そこまでにしときなさい、琴。

「小太郎、見参！」

「兄ちゃんカッケー」

「だろお？」

あの兄弟が来た。

「お？ この時間にクロがいるって珍しいねえ」

「昨日泊まってっただよ。くろたん」

「あー、なる……なんでまた哀愁漂ってんなあ」

俺は小太郎にWiiriモコンをパスした。

疲労から、体がかかんエネルギーを欲しているからだ。

志太、小太郎の参戦。

二人は恐ろしく強い。

最強のルイージと、最強のマリオである。

迎え撃つは、最強のベビーパーチ。

気弱なキノピオは、三人の気迫に怯えている。

そして、ヨッシーこと俺はみかんを食べる。

うまい、うまい。みかんは旨い。

エネルギーシユだ。

『ガチャッ』とドアが開く音がした。

「ちやおちゃお　星葉ちゃんだよ　」

星葉が来た。

ああっ、語尾の　がまぶしい！

だというのに、マリカをプレイ中の四人は気付いていないか、余裕がないのかで、こっちを見向きもしない。

「あっ」

あっ。くろたんはこっちに気付いた。

苦手なことをするときほど集中力に欠けるときは、他に無いから

なあ。

「なんか久しぶりだな、お前」

「そうだね、ボス」

なんで語尾が特徴的になってるんだよ。

「なんで？ ふつ。なぜなら、私は の妖精だから」

ぱちこーん とウイंकする星葉。

気のせいかな、ウイंकのときに が飛んできた気が。

それが俺の頬をかすって、俺の頬から血が吹き出た。

『どばああっ』

いや『どばああっ』て。

凶器じゃん。その、凶器じゃん！

「ふつ ばれたかよ」

ちよつと妖精さん？

はみ出してる。「」から はみ出してるよ！

そしてそれが、くろたんのおでこに刺さって、くろたん倒れたよ！

「生まれ変わったニユー・スターフェラーリ、なめてもらっちゃ困

るさ」

車かよ。

つか、なんだこれは。

マリカ集団も気付けよ。

「それは俺の　だぁぁぁぁ！」

ゲーム内の道端の、　を取ろうとする小太郎。

（マリカのアイテムの中の一つ……　は、一定時間無敵になれるのだ　）

あつ。志太の後頭部に　がつ。

刺さって……いたけど、　の移動力が復活して跳ね返って、星葉のおでこに刺さった。

志太よ、まさか防御力までパーフェクトとは。

「ば　ばかな　私の　スーダスト　シュリーケンが　」

もはや、セリフも解読できねえよ。

「ああつ。くそ！　志太　取るなよ！」

「ふっ……　は俺のだ！」

「くっつ。　志太クン……！」

志太、の使用。

「あはは

無敵だ

無敵無敵

ちよっ超ヤバイ

」

さすがは志太。無敵だな。

「いや さっきの どうやってしゃべってんのさ 」

ほんと、どうやってしゃべってんだろっなあ……。

いやいやいやいや、お前が言うのかよ。

「うわ、星葉いるじゃん」

「あーもう 今ごろ気付いたんかよ琴 」

「いったあ！ 飛ばすなって星葉！」

「うお、どうなってんだよコレ！」

「おっ。久しぶりだねホシ」

一人だけ反応つおい。

あ、しばらくマリカ集団とスターダスト・フェラーリかなにかの
コントをお楽しみ下さい。

「で、この ってどうやって飛ばすのホシ？」

「志太……やるつもりかよ、お前」

「ふっ ならば教えてやろうかああああ 」

俺

うおい。

「なにしてんだテメー！」

「お兄ちゃんファイト」

こ、琴さん？

「これなら安心だな！」

「だね！」

ちよ、待てやそこの兄弟！

「ボス　いくよ　」

いや、ちよ、つーかどうなってるんだよこれ！

な
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
う
！

終わりがあから、寂しき休日。

一月六日。午前十一時。

いつものごとく、コタツに入り、いつものごとく、みかんを食べる。

旨いなあ。これ作った人、天才だなあ。

となりでは琴が、寝転んでDSをしている。

テイルズ・オブ・ハーツだ。

現在は第二部をしているらしい。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「ヒスイかつこよくない？」

ゲーム中のキャラね。

「ああ、俺も結構好きかな」

「だよー」

琴が、俺の膝を枕にしてくる。

俺は琴の肩に肘を掛けて、琴の顎の下を撫でた。

すると琴は「ふい……」と息を吐いてから、DSを閉じてコタ

ツの上に置き、うつ伏せになって、俺の腹周りを抱きしめた。

そして、長い溜め息をつく。

「あと二日で学校かよー。うー……」

腹の真ん中あたりに、顔を押し付けながら喋る琴。

妙にこそばゆく、暖かい。

本当に、なあ……。

琴の髪に手を置く。

もつと長くなって、ほしいね。

くしゃくしゃと撫でた。

琴が顔を上げて、ジイっとこちらを見つめてくる。

カラスのようなガラガラした感じではなく、チワワのような寂しさを加えた目で。

何も言わずに。

「どうした？」

乱れ髪を垂らしながら、琴が俺の右肩に左手を添えて言った。

「……どこにも行かないよ？」

分かってるよ。

俺は腰に手をまわし、強く抱き寄せた。

うん、分かってるんだよ。

馬鹿な妹だね……。

午後二時。

リンが来た。なんか久しぶりだな。

「あはは、そうっすねー」

ちなみに琴は隣で寝ている。

「宿題を片付けてたんっすよー」

「ああー、なるほど。あれ？」

琴の頬をつつく。

ぷにぷに。うん、やわいな。起きないなあ……。

デコピンをした。

『バチッ、バチッ、バチッ！』

「ほがああ！」

「ぷふっ！」

三発放った。リンが吹いた。

「うう……な、なに？」

おでこを両手で押さえながら、起き上がって眠たげな目で見てくる。

なんか、くろたんっぽいな。

「お前、宿題終わった？」

ゆっくり、ゆっくりと、目が開いていく。

口もわなわなと開いていく。

そしてまた、ゆっくり、ゆっくりと横になった。

「おやすみなさい」

「うん。ちょっと待った」

「ふぎゅっん！」

寝ようとした琴の両頬を、急につまんだからか、訳の分からん声を上げてきた。

「はいうんおふぁ、おいしいふぁん！」

つまんだままだから、なんて言ってるのかは分からんが、たぶん「なにすんのさ」的なことでも言っただろうな。

「ぷふうっ！」

リンが吹いた。

「宿題は？」

ちょっとドスをきかせてみる。

「ふゅー　　ふゅふゅー」

つままれたまま、口笛を吹く琴（いや、これ吹けてないなあ……）
視線はリンも俺も、誰もいない方へ向けられている。

俺は琴を、脇を持って抱えた。

「あひっ！」

そのまま俺は立ちあがる。琴の足がブラブラ揺れる。

「あうっ。だめええ、くすぐった……っ！」

脇はだめええ！ はああううう……っ！」

眼前で琴の顔が、ふるふると震えている。顔を赤くし、はあはあ言っている。

「おお……なんかエロいつすね」

そんなことは構わずに、俺は二階の琴の部屋に入り、ベッドに琴を放り投げた。

「はあはあ、乱暴しないで下しあい……」

そこはリンの言葉にノるなよ。

自ら肩、はだけるなよ。

ちなみに、部屋のドアはリンに開けてもらった。

「宿題しろ。それまでは遊ぶの禁止」

「そ、そんなアホな！」

「はああ？ 今までサボってたのテメーだろ」

「すいません……。本当に、すいません」

「うわーお、先輩顔こわーい」

まじで、琴が泣きそうな声を出すので、とりあえず普通の声に戻して言った。

「宿題はこの部屋にあるね？」

「はい、あります」

「よし」

俺はドアの力ギを閉めた。

「なっ！」

琴の部屋のカギは、外から閉められるようになっていた。内からは、カギを持ってないと掛けられないのだ。

もちろん、それは俺の手中にある。

「宿題終わるまで、出さねえから」

「そんなアホな！」

俺は優しい声で言った。

「頑張れよ、琴……」

「お兄ちゃん……。うん、分かった！」

……て、それは無い！ それはナイよ！」

俺とリンは階段を下りた。

「うあああああああああ！」

だめええ！
だめええ！！

[illegible]

その叫び声を背中に浴びながら。

「先輩もなかなか鬼っすね」

「あれくらいしないと、こりないから。あいつはね」

もう、三時か。

「そっぴゃお前、冬休みいつまでなの？」

となりで、コタツに入ってみかンをパクパク食べているリンに、
聞いてみた。

「ウチんところは……。十二日までっすね」

「長いな」

「あはは。十二日まで、先輩を離しませんよー」

そう言うと、俺の腕にリンの腕が絡んできた。

「仕事あるっつの」

「あははー」

俺はリンを、元にいた陣に押し戻した。

「きゃー、先輩に襲われるー」

「あほ」

愛想の良いリンの笑顔。

なんでコレに、彼氏がないのか……不思議でならない。

「お前、高校に好きな奴とかいないの？」

「え？」

リンがこっちを見つめる。

首を少し右斜めに倒し、前髪を揺らしながら。

同時に、後ろのポニーテールも斜めを向く。

「先輩は？」

「は？」

カラダごと、こちらを向いてくるリン。

「先輩には、いますか？　好きな……ひと……」

その質問に、頭から即座に返答がくる。

「ただ、俺は。」

「いないなあ。出会いも無いしね」

答案用紙には、何も書かなかった。

「そつつすかー」

「ああ」

リンが下を向いた。

そして、そのままかんを口にする。

「お前は？」

「んー？ 内緒っす」

こちらを向くと、リンは、柔らかく微笑んだ。

「はあ？ なんだよー、教えた俺がアホみたいだろー」

「あははー」

お前、目が少し、赤いぜ。

六時ごろ。俺はリンと一緒に作ったケーキを、琴に持っていったあげた。

「入るぞー」

「うあっ！ お兄ちゃんタンマ！」

リンがドアを開ける。

俺が入ると、本棚のマンガの二三冊が勢いよく落ちた。

ふむふむ。なるほどね。

「琴ー」

「は、はい」

「お兄ちゃんと遊ぼうー」

脇を鷲掴みにした。

「すいませんんんんん！ほんとにつ！

うん！うあん！すいませっんっ！

ああああああ！！

すいませんんんんん！！！！」

「先輩、ハードっすねー」

あー、騒ぎきつたなー。

一月七日。 琴の冬休み最終日。

午後三時。

今日は昨日の反省を生かして、いつもどおりコタツで勉強をさせることにした。

やはり目の前に居た方が、ちゃんとやってくれる。

更に今日は、星葉も呼んでいる。

琴の向かいに座っている。

「あはん」

星葉が を琴に飛ばす。

琴の太ももに刺さる。

もう一つは、琴の横の俺の目に刺さったぎゃあああああああああああああ。

琴は漢字を、黙々とノートに書き写している。

やはり星葉が居た方が、無駄に集中力が上がるようだ。

「ホシは宿題終わった？」

志太がみかんを食べながら、いつもの微笑みを星葉に向ける。

「初日に答え移しまくったさ」

志太の顔の横を、スレスレで通り過ぎる。

志太は微笑んでいる。さすがは微笑み紳士。

琴が星葉をガツ！と勢いよく見る。久しぶりだな、コレ。

星葉は、そのスピードの速さにビビって、カラダをビクつかせていた。

そういえばコイツ、ビビりだったな。

「なに終わらせてんだ、星葉てめえ……」

そう言って、琴が星葉をギロギロにらむ。ひたすらにらむ。

志太は微笑んでいる。

星葉はまばたきをする。ひたすらまばたきをする。

そして目から を飛ばしている。琴に を飛ばしまくっている。

それを琴は、ひたすら手で掴む。掴む、掴む、掴む。

志太は微笑んでいる。

そして琴が星葉に向かって、一気に投げ返した。

「うわああああああああ」

刺さりまくって、語尾にまで刺さる。

あつ。流れの一個がこちらにまで来て、目に刺さったぎゃああああああああああ。

志太は微笑んでいる。さながら幼き堺雅人のようである。

「志太くんは終わったの？」

何事も無かったかのように、琴が志太に質問をする。

「うん。毎日やってたから」

でたよ、完璧回答。

琴もさすがに溜め息をつく。

「持ってきてるよ」

そう言つと志太は、お腹の白いポケットから数学のワークと社会のレポートを取り出した。完璧なドラえもんだ。

それを見て琴は、土下座をしながら「毎度クソありがとござい
ましたア!」と言つ。

志太は微笑んでいる。この状況だけ見ると、軽くSに見えるな。

俺のコタツ向かいでは星葉が、顔に刺さった を抜いていた。

「いてててて」

なんてシュールな空間だろうか。

しかし、みかんはこんな空間でも色あせることなく旨い。

うまい、うまい。みかんは旨い。

早速、琴が宿題を写しにかかる。

「さあ、お兄ちゃんも一緒に写して！」

やだよ。

「ケチー！」

ケチで結構。

「ケチー」

お前は何だよ。

隣の台所から、足音が近づいてくる。

「クッキー焼けたっすよー」

リンがクッキーを持ってきた。

サクサクしていて旨いなあ。

「んふふー　　でしょでしょ？」

得意満面の笑顔を向けてくるリン。

旨い、旨い。確かに旨い。

けど星形はやめてくれよ。なんか不吉だよ。

「確かにうめーさ　　とゆうわけで」

ほらあ。なんかやる気満々だよ。星葉がいるときに星形クッキーなんて、パーフェクトコンボすぎるんだよ。

「スーパー　スター　イリユージョン」

ああっ。　クッキー皿に本物の　　が！

しかも見た目が、クッキーみたいなスペシャルバージョンなが！

「うりゃうりゃうりゃうりゃ　　」

クッキーをかき混ぜる星葉。　コノヤロウ。

「　ロシアンルーレットおおおおおおお
開催iiiiiiiiiiiiiiiiiiii　　」

「わああああああああ　　」

リンが非常にワクワクしてらっしゃる。

琴はスルーして写し中。

志太は微笑んでいる。こいつは参加か。

俺は俺でみかんを食べることにしよう。

「先輩も一緒にやるっすよー」

『ピンポーン』

おおっ。タイミング良いなあ。

俺は玄関の方に逃げた。

くろたんが来ていた。

「ああ。なんてナイスタイミング、くろたん」

くろたんの、サラサラの黒髪を撫でる俺。

「へ？　へ？」

くろたんはキョトンとしたまま、コッチを見つめている。

俺はくろたンを、リビングに連れて行った。

「おおーっ。黒民先輩」

リンがくろたんの頬をグニグニ触る。

「くう」 相変わらずたまりませんなあ」

「い、いたいよ、リン……。やめてよ」

「良いじゃないっすかあ！

堅いこと言わないで下さいよー

もつと柔らかいこと言いましょうっすよー

えへへへへー」

グニグニグニグニ、触りまくるリン。

くろたんはコッチを見つめている。涙目だ。

志太は微笑んでいる。

俺は背後から、リンの髪を引っ張って、くろたんから引き剥がした。

「いたい！」

「やめてやれ」

「むう……」

くろたんが俺に近づいてくる。

なんだこの、いじめっ子にいじめられて先生に寄り付く子供みたいな図は。

「っーか早く ロシアンしようさ」

ああつ。また星が俺の目に刺さる……と見せかけて急カーブして、
となりのくろたんの目に「ぎゃあああああああああああああ
あ」

さすがは大凶。

ああ、そうだ。

俺はクッキーを一枚持った。

「くろたん、あーん」

「へ？　へ？」

くろたんの口にクッキーを入れた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ」

くろたん死亡。

「さすがは大凶っすねー」

リンがくろたんの死体の頭を撫でながら言った。

「みひろクンも、よく死ぬねえ」

志太は微笑みながら、クッキーを食べている。

リンは、倒れているくろたンをソファーに寝かせてからコタツに
入った。

今、全員コタツに入った状態になった。

「うあん!!」

星葉が叫ぶ。コタツの机がガタンと動く。

星葉の入ってるとこの横から、にゆるにゆるにゆるると何かが出てきた。

小太郎である。

「うおおっ！　いつからいたんすか、コッチン！」

リンがコタツから出て、スカートを両手でおさえながら叫ぶ。

「二時ごろからだ！」

そうそう。志太と一緒に来てたなあ。

その後、いつの間にかいなくなってたなあ。

「しかし、星葉……。星柄をはいてくるとは……。しかも食い込みがすごあああ！」

「うおおっあああふあああああ！　な、ななに言ってるんさあああああああ!!!」

立ち上がって、小太郎の頭を踏みつける星葉。顔が真っ赤だ。まるでリンのようだ。

「
いた
たい
いた
いた
いた
いた
いた
いた
いた
いた
！」

「あああもおあああああ！」

付け忘れてんなあ……。

琴の持つシャーペンが、プルプル震えている。

「ホシおもしろ〜」

星葉が踏む。

「あああああああ」

小太郎が踏まれる。

「おおおおお」

「あああああああ」

「おおおおおお」

「あああああああ」

「おおおおお」

「あああああああ」

「おおおおお」

「あああああああ」

[illegible]

おおおお。琴がキレた。

星葉の肩を叩く、叩く、叩く。

「宿題があ、終わんねーだろうがああああああああ！！」

小太郎には膝蹴りをかます。あつ、やばい。白目向いてる。琴強いなあ。

星葉も琴に反撃する。パンチしまくる。

「琴ー、ホシー。落ち着けー」

志太が星葉を抑え、俺が琴を抑えた。

十一時。みんなが帰ったあとのこと。

俺は玄関のみかん箱から、みかんを補充。

リビングに戻ると、寝息が聞こえてきた。

宿題の上で涎を垂らしている琴。

ベタな妹だなあ、もお。

俺は琴の背中に布団をかける。

「俺もベタか……まあいいや」

俺はコタツに入ってみかンを剥く。

「くっそお……せいはのやろお……」

琴を見る。なんだ、寝言か。

……ふむ。

やはり、みかんは旨い。

俺は仰向けに寝転んだ。

「はあー、明日から仕事かよー……」

そう思つと急に、あの乱暴な騒ぎが恋しくなつちまったよ……。

あー、騒ぎきつたなー。
(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7408f/>

ダラダラみかん。

2011年9月8日02時37分発行